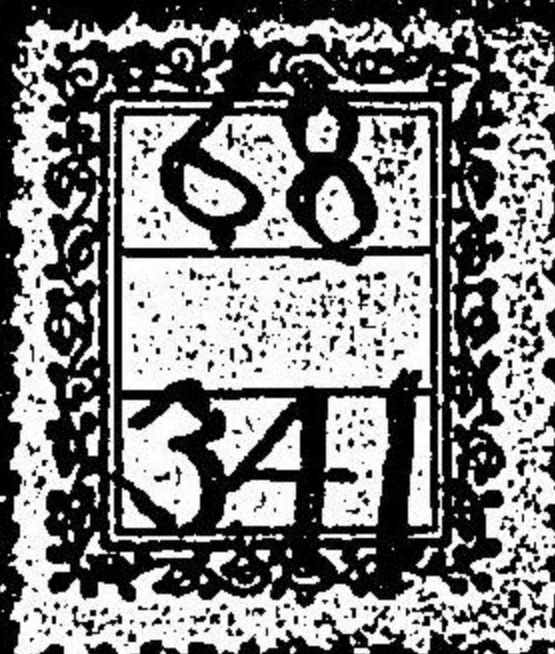


ナポレオン

原余三郎著



007707-000-1

68-341

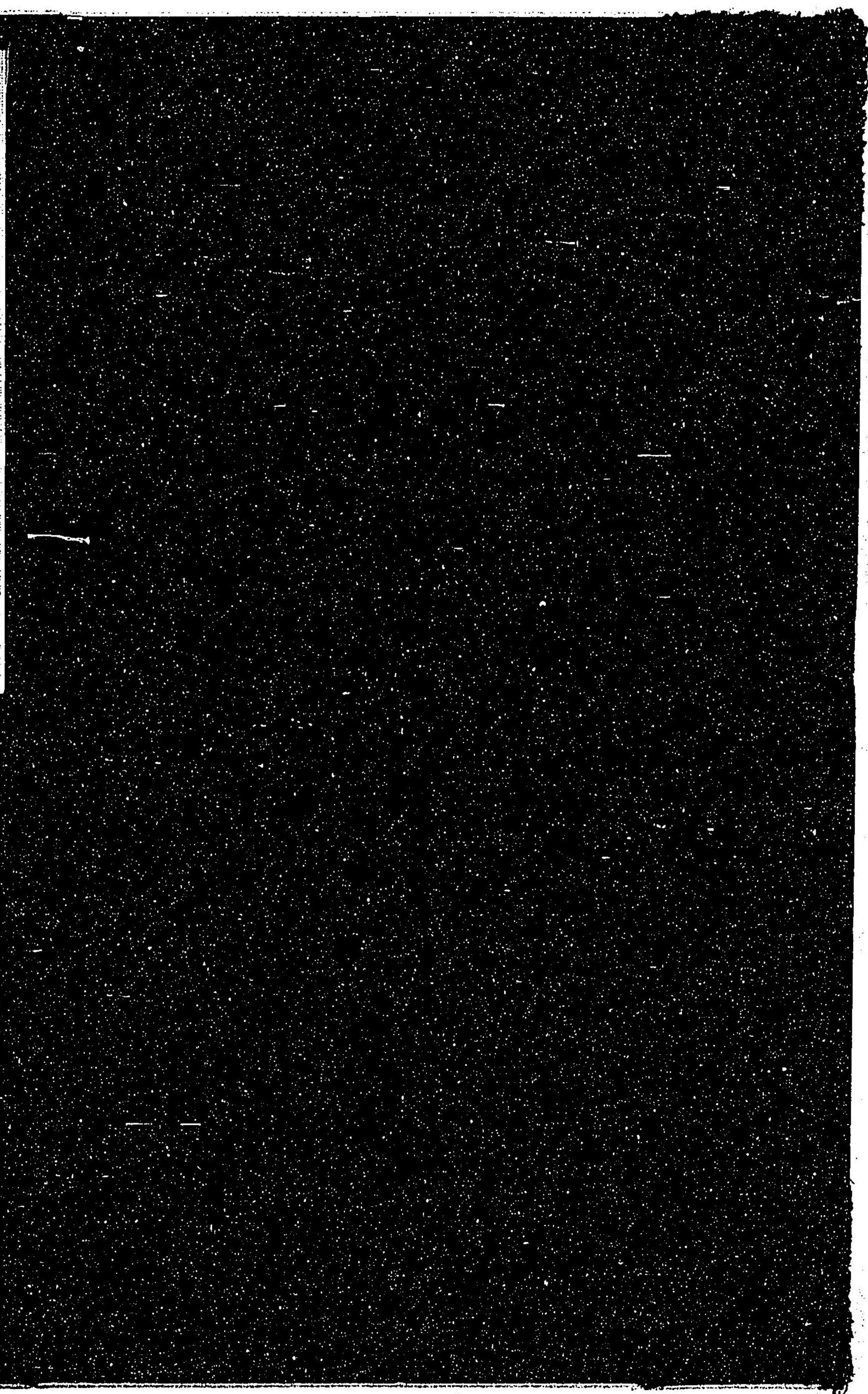
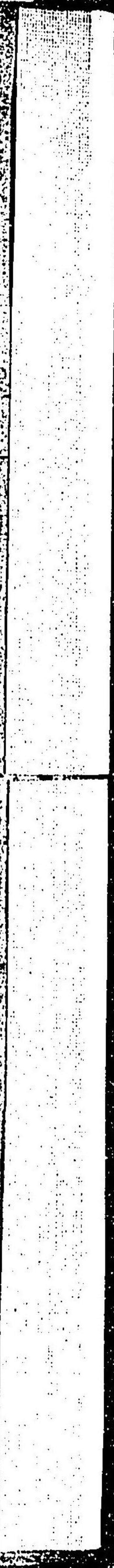
ナポレオン

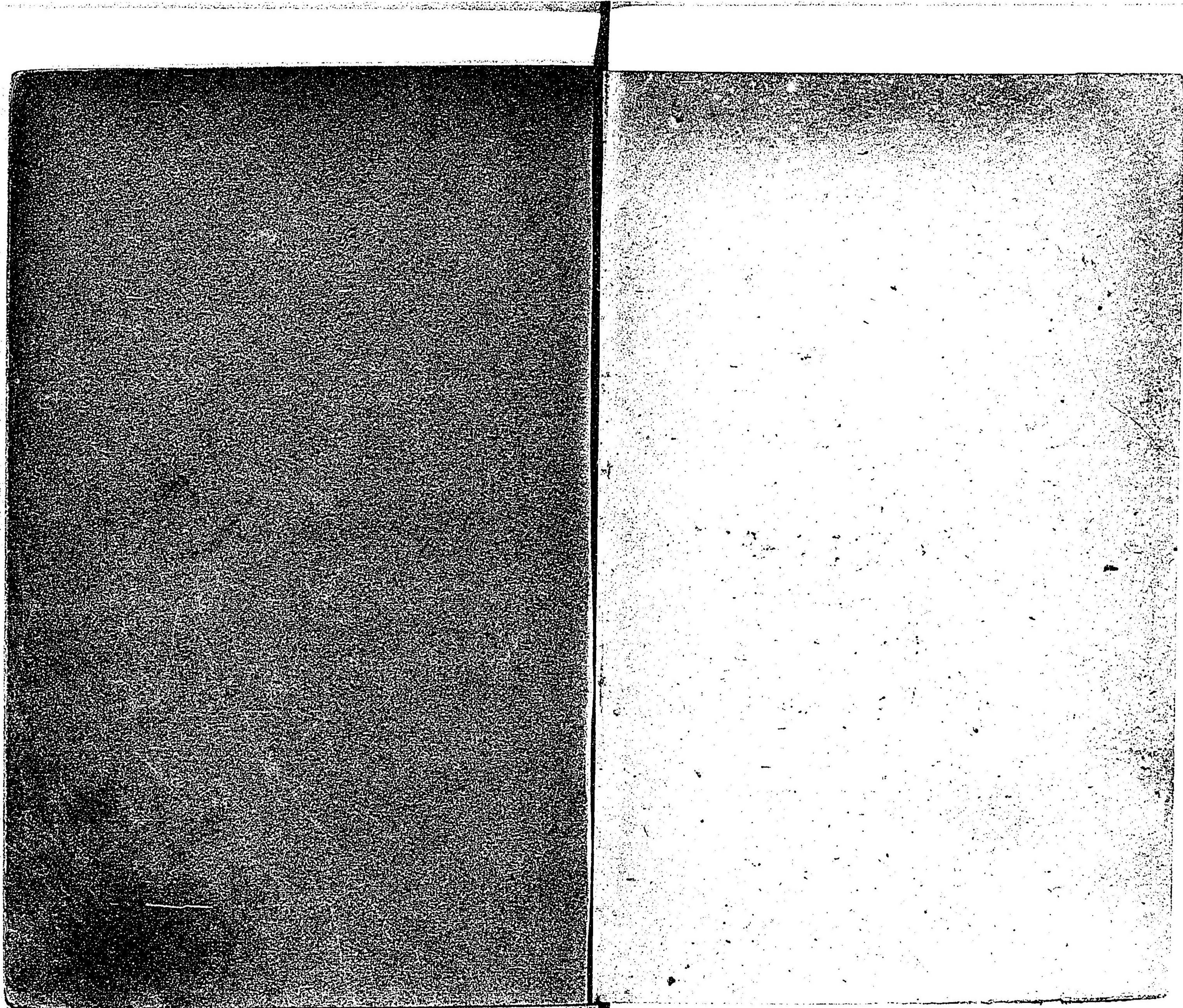
原 余三郎 / 訳

M25

ACM-0129







68-341

№1450/100

ナポレオン・ボナパルト 自録

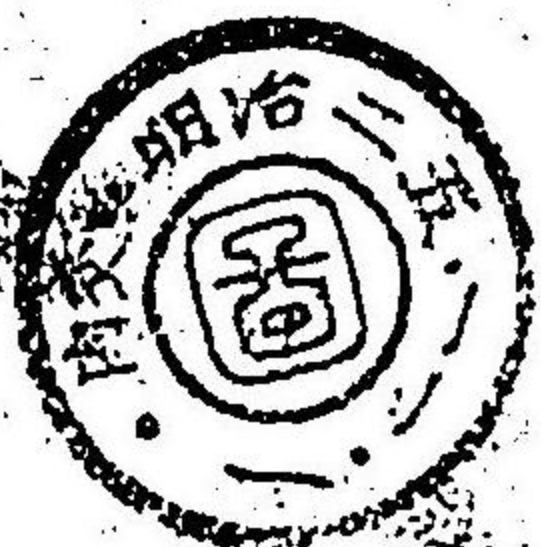
外篇

軍人としてのナポレオン

第一章

國當時の位地、奈翁戰畧一斑

歐洲文學の泰斗にして、
 對する批評の外國文學の味者の説、狡猾者の所論のみ、
 戰は實乎列國其主なる乎、
 マリソンの偏見、
 絶巨の偉人、
 今尙覆面裡に、
 歐洲大陸專制治下の状態、
 極力平均の地動けり、
 天轟けり、
 列國帝王の狼狽、
 國の内治に急なり、
 善惡邪正、
 コルシカの健兒、
 巴里一揆、
 伊太利出征の奇功の戦艦、
 豊に久しく小池に潜望せんや、
 埃及遠征之に對する世の評論、
 國の第一執政官となる、
 英國、
 日耳曼に送れる二通の書翰、
 直情を據べて相談をもちめたるものにあらずや、
 英相ピットの無禮、
 ナポレオンの激怒、
 勝利は到るころに、
 佛國軍旗の上に宿れり、
 慧敏の奇智、
 超凡の能力、
 リューネビルの條約、
 「總平和」、
 列國の關所々々は、
 渾べて其鎗鎖を解脱せり



第貳章

列國の新驚慌、奈翁戰畧一斑

奈翁滿腹の經綸○佛國の新誕生○英國の嫉妬○英國の新恐慌○英國の條約破棄
 ○吾渠を倒すにあらずんば渠吾を倒さむ奈翁の炯眼○英國公使リエットウオース
 に寄せたる書翰○詭計猾智○ア、是れ果して誰の罪ぞ○船大工の槌聲斧響は大
 砲小銃の響と相和して天を轟かし地を撼かせり○英國露國を引入る○其底意○
 平和は佛國の希望する所なり○謀左歴々○四ヶ國同盟○諸豺猾狐争て力を角し
 て相對することを得んや○三萬の俘虜に對しての奈翁の演説○佛國は如何なる
 邦なる乎を思へ○奈翁の怨望○第三の虐殺起れり○蓋し隠れり蓋し隠れり○龍
 騰虎嘯○三昧○斷頭機は是れ一の機械のみ○冷酷なる手○有用の鐵有用の材○
 精金美玉の君子にあらず○曲學阿世の文人詞客○^{ネチニヤ}萬有に對し人類の以て誇るへ
 き例證一個を失ふなり、

内篇 一個人としてのナポレオン

第壹章

奈翁の幼時、特質、駭絶の腦力、駭絶の勤勉

ブリエンの學校に於ける頑童ナポレオン○學窓の夢、散策の默想○恰好の舞臺○
 世間果して幾人かある○一軍隊の都督に擧げられし折の高言○成功の目算立た
 ざる事を敢てする如きさる愚かなるものにあらず○二機の反對せる心のハタラ
 キ○渠の心は閃電の敏速を以て驅け回れり○然れども質直鞏固なる道理之に隨
 伴せざるはなし○一飛直ちに最後の終局點に突入す○二者共に最の字を冠らす
 るに足る○綜合統一の力○牛刀雞肉○冷熱兩所に處する敏腕○古今獨歩の大軍
 人○一歳足らずの短日月○ナポレオン軍法説明○蓋し絶無ならむ蓋し絶無なら
 む○閃電よりも速か落雷よりも突如○傍若無人○ナポレオンのナポレオンたる
 所以(反對の行爲)○死地に投ずるは宛なから輕佻なる青春の徒が其愛好する舞踏
 會に急ぐが如きものあり○其例證○ナポレオンの雄辨○泣音叫聲○勤勉○不倫
 快○時間の規定○稀有の忍耐力○冷靜

第二章

奈翁の自信、自任、性急、政治、政畧

渠は儼オゴシクかなる信仰を以て偏へに獨自一個に頼れり○他人にありては狂に似たり
 渠にありては大智識たり○ツィロンツィロンの園みに際しての渠の方寸○窳雜なる事業
 冷靜なる分別○渠は危殆の何物たるを知らず○同一なる自信を以て佛國の帝坐
 を翺翔せり○同一の着眼○己と競争すべきものは世界の大の一あるのみ○平民
 王○俄爾猛烈驟起せり○軍旗アルプスの峻嶒に懸る○砲聲ダニューフ河畔一帯
 の地を震蕩す○驚を咒詛するの隱語○絶望的の猛進○確信、確任○眉軒らす目ま
 じろかす○不穩熱燥急病○渠は驍馬に巧みならず○ソレ馬○書信は其ま、途上
 に投げ棄つ○而かも渠ハ威儀を失はず○地圖は渠の熱愛の伴侶たり、燭光燦爛○
 天下の一奇觀○マリー、ルイスとの婚儀の折○渠の一大缺點○渠が憤怒に堪えざ
 るは眞實にあらず○大軍師大戦將たるに共に大政治學者大政治家たり○勇者と
 してはシーザルシーザルと均しく政治に於ける聰慧と於てはベーコンベーコンに優り、手腕に於て
 は列國帝王顔色なし○富は貧の前垂より流れ溢れぬ○六ヶ月間の休戦○利を以
 て露國に喰はす○プロシヤを晉同盟に加ふ○デンマーク、スウーデン諸國との同

盟○有名なるホーヘンリントンの大戦○

第三章

奈翁の道德、慈悲、死時

奈翁とマシントンの比較○渠は武人なり○渠は殘酷なる惡魔にあらず○兵士に
 對しての慈悲○渠が生涯中の一大汚點○決意○イルメの脱走○國民の歡迎○流
 離中○死時、風雨慘澹
 編纂者が奈翁に對しての所感

ナポレオン、ボナパルト目錄終

ナポレオン

原抱一庵纂譯

外篇 軍人としてのナポレオン

第壹章

佛國當時の地位、奈翁戰畧一斑

歐洲文客の奈翁に對する批評○米國文學○昧者の説、狡獪者の所論のみ○戰は實
 際佛國其主なる乎列國其主なる乎○マリソンの偏見○絶巨の偉人今尙覆面裡に
 あり○歐洲大陸專制治下の状態○權力平均ポラシス、カフパライ○地助けり、天轟けり○列國帝王の狼
 狽○佛國は内治に急なり○善惡邪正○コルシカの健兒○巴里一揆○伊太利出征
 ○奇功○蛟龍豈に久しく小池に潜蟄せんや○埃及遠征、之に對する世の評論○歸
 國○第一執政官となる○英國、日耳曼に送れる二通の書翰○直情を據べて相談を

もさめたるものにあらすや○英相ピットの無禮○ナポレオンの激怒○勝利は到るころに佛國軍旗の上に宿れり○慧敏の奇智超凡の能力○リュエーチピルの條約○^{ゼネラルピース}「總平和」○列國の關所々々は渾べて其鎗鎖を解脱せり

感情に訴へんとしては、ウオルズオース、ソーセイ、バイロンの徒其詩を以てし、論議に出でんとしては、スコット、アリソン、其他重もある英國の新聞記者輩其文章を以てし、渾べて皆ナポレオン、ボナパルトを憎惡擯斥し、其の雄才偉畧は殆んど天人に等しからむも其の殘虐の行爲暴慢の私慾より見れば、渠の實に世界稀れに見るの『大魔鬼』に外ならずと、叫呼論斷せざるものは殆んど稀あるに似たり。佛國に深き怨みある、特にナポレオンに深き怨ある英國の諷客、單り以上の如く論斷叫呼するのみならず、露西亞、日耳曼、其他歐洲南部の論客、また皆ナポレオンに敵意を挾まざるはなし。蓋し、ナポレオン、品質排斥論は、歐洲今日の輿論とも

見るべきなり。

ひとり歐洲の論客のみならず、邦土隔絶し交渉疎濶なる西半球北米の文士にして、たま／＼ナポレオンの人物批評を試むるあるを見れば、亦また其口吻を歐洲人と同^うするなり。米國文學の英國文學より、至大の感化を受け居ることは人の能く認むる所、英國論客の所論即ち取りもあはさず、米國論客の所論ありとすれば、ナポレオンに對しての感情の彼は同一なるも異むに足らざるべき歟。

今日歐米の文士が、ナポレオンに對して懐く所の感情は實に以上の如し。然れども、是れ畢竟偏頗の見なるのみ、淺薄の判斷あるのみ。佛國當時の地位を知らず、ナポレオンが如何の境に立てるかを知らず、列國當時の政畧を知らず、若しくは知て知らざる眞^ま似^にする狡獪者の所見なるのみ。蓋し世の佛國當時の歴史、若しくは所謂ナポレオン評論なるもの、

Varm! Varm! Henry's hand

多くは、唯た戦闘の状を描けるものに過ぎず、死傷の数を算せるものに過ぎず、争闘の場と月日と將校の名とを列擧せるものに過ぎず、要するに當時の諸戦争の惨澹殘酷なりしを揚言するものに過ぎず、其慘酷なる諸戦争の始終人の視聽を惹けるものはナポレオンあり、一呼して列國諸帝王の膽を寒からしめたるものはナポレオンあり、古來未曾有の大亂の旋渦の中に屹立して、咆哮睥睨せるものはナポレオンあり、何人も率ゆる能はざるほどの大軍を、手足の如くに縦横に運轉指揮せるものは渠ナポレオンあり、斯の大亂の間一舉一動直ちに其偉大なるさし響を列國諸軍勢に與へたるものは渠ナポレオンの如きはあらず、斯の殘酷ある大戦争の大立者はナポレオンなり、ナポレオンの軍略の敏捷あるが故に歐洲列國の兵頗ぶる殘酷の死を遂げたり、斯る理由を以ての故にナポレオンは殘酷の人あり、暴虐の人なりと云ふに過ぎず、佛國が當

時如何ある危機に瀕せる乎、如何に此危機を救ひくる、人を望み待てる乎、歐洲列國が如何に屢々同盟して佛國を脅迫せむと企てたりし乎、戰は實際佛國より挑みたりしなる乎、列國より佛國に挑みたりしなる乎、ナポレオンは實際己れ一個の慾を充たしめむが爲めにのみ兵を動かしたりしなる乎、或は佛國の名譽權勢を保持せむが爲め已むを得ずして兵を使ひたりしある乎、渠は果して其品質無慈悲殘酷の者にてある乎、毫毛も憐恤の情を有せざる者にてある乎、一個の大將として渠は古今の名將に譲るところある乎、一個の帝王として渠は果して從來の諸帝王より專横なりし乎、一個の人として渠は果して惡虐無道の者と云はざるを得ざるなる乎、渠を惡虐無道と云はざるも歐洲當時の帝王將相中誰人を指して惡虐ならず無道あらずと云ふを得る乎、渠の品質は如何、渠の品行は如何、渠の志願は如何、渠が政治上の主義は如何、渠が

社會に對しての觀念は如何、歐州當時の忘殘ある戰爭の原因は佛國其主ある乎、或ハ列國其主ある乎、凡そ此等の事に關する眞正の批判評論は蓋し今日に至るまで歐米州の文書中に絶無ありと云ふも不可なきが如きなり、歐米州の文士は果してナポレオン、ボナパルトの眞面目を觀察し描寫するの眼識、亦き乎力量亦き乎、或は能く其眞面目を觀破し之を描寫するも敢て難からざるの力量と眼識はあるも故らに知らざる眞似^トして自國々々の瓊瑤を隱蔽せんと欲するある乎、邪正善惡は暫らく措くも、ナポレオンの如き世界の偉人を等閑に看過し去るは、蓋し文士の道にあらず、其知て知らざる眞似^トする如きに至てハ、文士の罪や大あり、共に評論の記者といふべからず。

マリソンの如き偶々ナポレオンの眞品質を認めたるが如くあるも、尙は自國の偏私の見に制せらるゝを免かれず、ナポレオンを以て良心を

きもの自己の怨の爲めには如何なることをも敢てするの劣丈夫なりと叫ぶに了れり、之を證するに渠はナポレオンが發怒の際憤懣の折に無意味に放てる激語を把て、之を誇大にして、以てナポレオンの品質を判定するの料に供せり、是れ恰かも人の寢室に潜入して其囁語を把り、若しくは人が煩悶の際婢僕に語るところの瞬時の暴言を報して、其人平生の高尙なる行爲を打消さむとするにもひとし、到底偏頗の陋見たるを免かれざるあり、また米國の文士がナポレオンに對する多くの批評を見るに、英國文士の謬見に附和雷同せるの迹は云ふまでもなく、たまたま其創始の見なる乎と見れば、紛擾混亂吞噬剝奪の修羅場に生長せるものとして、ナポレオンを見ず、清淨靜平ある米國の新天地に生息せるものとして、批評を試むるもの十常に八九なり、議論の其當を失するも宜あらずや。

此くの如くにして、ナポレオンの名は何人も之を知らざるなきも、ナポレオンの真相真面目の未だ覆面裡に蔽はれあるあり、文士未だ其覆面を取除くことに力を効すものあることなきあり。

ア、絶巨の偉人、ナポレオン、ボナパルト、吾人は渠が効果を收むるに必要あるべしと思はるゝ、些事細事の一個をだに見遁がすことなき綿密ある注意力に富めると同時に、偉大の結合を統一するの驚くべき概括力を有せることに就きて考ふるも、渠が決斷の敏速なるに就て考ふるも、其敏速なる決斷を運び行るの敏速なるに就て考ふるも、渠が疲勞なきの精氣、其間斷なきの勤勉、世界の各處に五十万の軍勢を裕かに運轉指揮するの傍ら、法律を改正し、財政を整理し、工藝を奨励し、文學を復興して、尙ほ綽々餘裕あるの大能力に就きて考ふるも、將た又、渠がアリエソンの兵學校に在りて、高慢なる一頑童たりし時より、歐州の最も光譽あ

る王位に即くに及べるまでの、眞に人目を眩惑せしむるの經歷の跡を尋踪し見るも、ア、渠は同一に駭絶の世界の一偉人たるを失はず、吾人が人類の何ものたるに就きて研究を要するとき、渠は眞個に絶巨の一題目を吾人に供するなり。何れの點より見るも要するに、渠は到底一個の巨人たるを失はず。

吾人は如何にしても、斯の巨人を覆面裡に埋没し置くに忍びず、聊かこゝに、渠の人品に觀察批評を試みむとす。

渠の人品に批評を試むるに先ちて、吾人は從來の歴史の誤謬偏見を是正せざる可らざるの要あるを見る。

從來の歴史の誤謬偏見は、一にして足らずと雖も、其の最も認めれるは、歐州當時の戦争の残酷妄殘、ナポレオン獨り全く其責を負はざるべからずとあすにあり。戦亂の起因を全然ナポレオン一個の私慾に歸するに

あり。實に是れ謂れなきの所見あり。今少しく當時の事情を開陳せむ。實際に歐州大陸專制治下の國々を歴觀し、如何に共和主義あるもの、君王民庶より奇怪不思議なる感情を以て厭惡せられたりし乎、如何に民權あるもの、笑ふべくも人民より擯斥せられたりし乎、己の權力を屈し己の尊威を辱かしめらるゝも、民人は尙ほ渴くが如くに壓制ある君主政治を愛好せる乎、其の實際の眞面目を達觀洞察せるものにあらざるよりは、誰か佛國革命時代の歐州諸列國の政畧の因て起る原を推知し能ふものあらむや。權力平均パランス、オク、ペライ、是れ當時歐州列國民人の唯一の懸念の存する所ありしあり、列國視線の注射する所唯だ此の一點にありしあり、此を保持せむが爲めには君主も人民も共に力を戮せて看守護衛に懈ることあらざりしなり、自由を獲むよりは權利を伸べむよりは壓制政府の下に屈從しても邦家と邦家との權力平均には力を盡さ

ひと心懸くるもの、是れ歐州列國當時の人民の意氣ありしなり、互に相睨み合ひつ、一不平均の認めらるゝに遇へば、世界無二の大事件の起きたらむやに、狼狽周章して、辛ふとて其舊に復すに及び、始めて吐息つき、唯だ、微弱ある平和をのみ望み希へるもの、是れ列國當時の状態なりしなり、此時に當りて俄然歐州の天地に一窟隙の生たり、地動けり、天轟けり、バーホンの王位傾落せり、路易王没し去れり、遠くしては北米合衆國獨立の檄文天外に呼はり叫べり、革命と呼ばはる聲歐州の腹部に起れり、天賦人權と云へる未曾有の音響列國君主の耳朶を貫射せり。ア、斯る急激の現象に接して、列國の民いかでか喫驚せざることを得んや、始めは只だ呆然として手を拱きて遠くより鼎の湧くが如き佛國の狂亂を覗き瞰だせり、然れども漸次其革命の本質を明らかにするに及び、始めて其事變の尋常をらざるに心附けり、心附きては自國自國

に偉大の關係あるものあることをも明らかにせり。翻りて佛國自身も就きて見るに、實にマコーレーの言の如く、痛切の必要ありたればこそ、爾く急激に革命の旗揚を遂ぐることを得たるなれ、といふ。歐洲會て見ざるの大變革を擧げたることにしあれば、國內の紛擾混亂の一朝一夕にして中々に鎮定すべくもあらず、故より固より他邦を侵襲せんなどとの存慮のあるにあらず、又他國との戰鬥を好むべきよしもあらず、偏へに自國の安寧を保維せむことにのみ專ばらなりしなり。佛國は是くの如く自國の革新に全力を奪はれて、他を顧みるに追わらざりしかども、列國は今手を拱して傍觀することのあらざりしあり、共和政體の根幹未だ堅からざる中に、之を殄滅し盡して、革命熱の傳染を妨碍し杜絶せんと欲し企てつるあり。路易を助くるを名として始めはオーストリア、プロシヤ相同盟して軍を起せるが、路易の死後、ホーランド、スベ

イン、イングランド又澳、普兩國の同盟に加入して、共和政體破壊に各々其全力を注ぎぬ。斯くの如くして、歐洲全土を震蕩せる殘酷ある大争亂は其端を披き始めたり。斯の争亂や、蓋し主義の戦争あり、專制主義が自由主義を壓伏せんと欲せるより起因せる戦争なり、共和主義が君主主義に抵抗せるの戦争なり、而して戦端を披き始めたるは佛國と列國と兩者孰れか主あるぞ、共和政體と君主政體との優劣善惡の暫らく論せずして之を措く、唯だ共和政體の建設は自國に不利あればと云ふの故を以て、漫りに師を起して他國に迫るは、是れ果して國交際の上に於てあり得べきの事ある乎、善惡邪正蓋し智者を俟て後に知るを要せざるあり。精弱爲すなきの將相ならば、黙して諸列國の云ふところに服従もせむ、不羈豪邁なる渠ナポレオンの如き人物争でか、列國の無禮傲慢に唯々として低頭せむや、渠が一起して歐洲を震蕩せるもの、寧ろ渠が功

名と謂ふべきにあらざる乎。列國の同盟軍が、來因河畔に其軍勢を押し寄せつゝありし頃は、ナポレオンは未だ一個の壯童に過ぎざりき。然れども、數年間列國との戦争の餘、國力疲弊せるに加えて内には争擾の常に絶えざるあり、國勢最も危殆の時、佛國が吾救世主と仰ぎ戴けるもの、即ち此のユルシカの健兒、ナポレオン、ホナパルトにてありしなり。

パリ一揆に奇功を顯して騒動を鎮定せる後、ナポレオンは伊太利出征軍の都督を命せられたり。渠は其附與せられたる軍勢の糧食乏しく手當薄く兵士の脆く弱きを見ると雖も、自己の才能熟練を頼みとして、快く其命に服し、僅々四萬に充たざる兵を以て、鍊熟精銳の聞え高き當時のアウストリア軍を縦横無盡に蹂躪し、國人歡喜喝采の裡に、巴里に歸來したりき。其翌年渠はロムバードを征服し、佛國共和政には最も利益多きカムボ、フアイモの條約に、アウストリア全權公使をして唯々

として調印せしめぬ。次で、ミルレツシモ、モンテノット、ローマ、アッコラ、カズチグリオン、リポリー等の諸劇戰に於て渠は奇功を奏せざるはあかりき。渠の戰場にあるや、將校將士の如くにはあらで、一個の大將として働らけるあり、其大膽、勇氣、熟練、殊には渠が鷹揚ある威風に、見る人舌を捲かざるはなかりき。

數度の戦争に毎に凱歌を奏して巴里に歸り來るや、萬民皆な口を極めて渠の奇功を讃せざるはなく、一個の將士としては實に無上の榮を擡ふと雖も、渠は毫毛も満足せることゝてはあらぬあり、從來の小争闘小接戰は未だ以て自己滿腹の經綸畫策を運用するに足らずと、渠は爲せるあり、蓋し渠には轉だ脾肉の歎ありしなり。加ふるに己が服従せざるべからざる主將の闇愚を以てす、蛟龍豈に久しく小池に潜伏せむや、ナポレオンは遂に埃及遠征の事を政府に申し出すに及べり。

埃及遠征、是れ世の論評家がナポレオンの暴虐を證するものありとし
て、得々揚言する所のものあり、故なきに兵を出し、自個の私慾を飽かし
め、むとし、無事の殺生を遂げたるものなり、として非難叱責して、假さ
る所のものなり。清淨なる眼を以て之を見れば、埃及遠征、固より責むるに
足るものあり。然れども英國政府がナポレオンの此の遠征を喋々して
口を極めて其非を鳴らす、が如きは眞に笑ふべきの甚しきものあり。ナ
ポレオンは蓋し英國政府の政略を襲用せるものに過ぎず。東方半開未
開の地は、英雄巨人の手腕を弄し、翫ぶ場所として、當時は眺められたり。
英國は印度に手を伸ばせり、ナポレオンは埃及に足を投せり、若し貪慾
なる劣情を難せらるゝ、あらは、英國佛國共に同一に其の難詰を蒙らざ
るべからず。豈に獨り佛國をのみ責むべきならむや、豈に獨りナポレオ
ンをのみ咎むべきならむや。英國の論客詞人が囁々する所の如きは、蓋

し自家眸中の梁木を拂はずして、他人眉端の塵を數ふるが如き類あるのみ。

豈に獨り英國のみならむや、ロシアも然り、アウストリアも然り、プロシ
ヤも然り、以上の三國がポリアンドを各々分割して蠶食せるの手段は
如何、ア、斷つて佛國のみを咎むべきにあらざるあり、類ひ稀なる厚顏
を有せざる限りは、歐洲列國決してナポレオンの此の埃及遠征を非難
するの顔色あらざるべき筈あり。

ナポレオンが其の得意の軍を埃及に進めつゝ、ありし間に、アウストリ
アは其會つて佛國の爲めに覆はれたりし、利益を回復せむと企てたり、
アペンニースより佛蘭西人を追ひ退けぬ、佛國は日に其地方に於ける
權勢を失はんとするあり。ナポレオンは本國の此の消息を獲驚きて佛
國に馳せ歸れり、國人は今、能くナポレオンの技倆智勇の程を知りぬ、

時の主將の優柔爲すあきを認めぬ。茲に於てナポレオンは萬人推戴の
 裡に第一執政官に擧げられたり。第一執政官に擧げらるゝや否、ナポレ
 オンは其の滿腹の才能を豈に國家の整理に傾瀉せり。柔軟ある政府を
 鞏固にする事、紊亂せる收税制を統壹する事、諸律例の制定及び其執行、
 凡そ此等内治文治に關する事、今之ナポレオンの胸底に簇がり聚まれ
 り。當時に於て平和は最も渠の好み望むところにてありしなり。去れば
 第一執政官に擧げらるゝ間も、渠之手みづから二通の書狀を認め、
 一を英國帝に送り、他を日耳曼王に寄せ、懇ろに平和の來らむことを望
 めり。兵事の頭領として渠は既に満足なる名譽と讚賞を獲たり。今は渠
 は佛國を文明からしめむと望みぬ。蓋し渠は今内治の頭領として名聲
 を博せむと望めるあり。英國帝に送れる書狀の一節には實に下の如く
 ありき。『過去八年の間既に其苦みを嘗め試みて最早充分なりと思はる

吾々の慘憺たる戦争ハ今後尙ほ何時までも持續して、已むときなら
 らしめざる可らざる乎。何等か互々に解け合ふ手段の存せざるものな
 る乎。安寧と獨立とを保持するに要ある界限を超えて、莫大の富と至大
 の權とを業に有する大強國が、虚しきカザリの犠牲として、商業の發達、
 民庶の安慰を、争鬭の『神』に供せざるべからざるの要あるものにや。コ
 ン『平和』を齎らし來るものは、最大の名譽無限の恩惠、一に受け、一に授く
 るものなることを、邦々の政府々々の理解すること能はざるは抑も何
 の故ぞや。陛下の一考を煩はさんと欲する所なり』云々。日耳曼王に寄せ
 たるものも、又以上と同しき氣高く男らしく秘すところ、亦赤心を打
 明かしたるものにてありき。以上の文言に何等か詰難の意味ある乎、何
 等か過當の要求の存するものある乎、何等か禮を失せるの痕ある乎、唯
 だ是れ心よりして平和を欲し、懸引なく、諂詐なく、直情を摠べて相談を

需めたるものにあらずや、和睦の條約書等の事に關しては未だ言ひ及ばず所何もなきにあらずや、今後佛國の需むる條約に意に充たざる所あらば意に充たざる處置に及ぶも可なり、到底和すべからざるものあらむには和す可らずと答ふるも可あり、苟くも佛國の第一執政官が斯くも丁寧に、斯くも無邪氣に男らしく、眞情を據へたる書狀に對し、單に禮を返さるのみあからず、其書を斥け、刺へ、佛國の暴虐を數へ立てナポレオンの私慾を責むるが如きに至つては、何ぞ其心情の陋劣あるや、何ぞ怯懦の甚しきや、而して英國政府は實に其の心情の陋劣を顯はし、實に其の甚しき怯懦の所爲に及べるなり、英相ピットは、ナポレオンの過去の經歷の上に百千の缺點を擧げ數へ、ナポレオンの政略は畢竟歐洲大陸の君主制と宗教とを破壊せずむば已まざるものあるを難ト、それ此くの如くあれば、英國政府は明白なる悔悟の證と償ひの相當なる

報とを得るにあらずんば、ナポレオンの和睦の申出に信を置く能はざる旨を述べ、其悔悟の證と償ひの報とは、ハーボン王位を復興するの唯だ一にあることを申送れり。ア、是れ何等敬を缺くの言分ぞや、ナポレオンの意今は決せり、渠は叫べり、一國が他の一國の上に強求する所あり其強求を遂げて以て和睦せむと欲する限りは『平和』如何にして來ることあらむや、咄、英國の妄狀にして不明なる、爾は吾佛國には一個の大手腕を藏め置くことを知らずや、斯の大手腕は常に一種のウナリをなして爾等の頭上に閃くことの晩きを是れ憶みとあし居るあり、其今日に至るまで國境を脱け出でざる所以のものは、偏へに爾と吾との庶民の困苦を思へばあり、而して爾は今や吾庶民に侮辱を加えぬ、吾共和政に罵詈を試みぬ、見よ、絶巨の手腕は遠からずして爾等の頭を撲倒せむ。』と、而してピットに答へては曰く『吾にして若し、メナニアール王位の興

復を見るにあらざる限りは斷して英國との和睦を肯んせずと云ひ張らむには、足下は抑も吾を指して何と云ふ」と、ア、是れ以て足れり、千百の曉舌よりは、單一にして直斬る以上の言、英國の高慢の上に至痛至切の打撃を加えつるなり、英國は佛國共和政の革まらざる限りは到底和を講ずることあらざるべし、佛國は英國が頭を垂れてナポレオンの足下に跪つかざる限りは到底兵を休むるとあらざるべし、此くの如くして、ナポレオンが望み希へる『平和』^{ピース}は到底兩國間には來るべからざるものとなれり、日耳曼を英國の同盟より引離す能はざる事、ナポレオン能く之を知れり、渠は今は日耳曼より回答の來るを待つ、の要あらざるなり、渠は直ちに戦闘の準備に着手せり、渠はアウストリア人を其都^{ミューン}に追退けんが爲め、精銳の兵をムラ^{ナポレオン}股肱の將なり)に率えしめてスワヒアに向はしめ、マツセナ(又那翁幕下の名將あり)を伊太利に

派遣し、同時に那翁自身はサン、バーナードの高處よりロム、バーデーの平原に急轉直下せり。
マレンゴの激戦に渠は再び伊太利を征服し、ムラはアウストリア人を追撃してダニエーラ河を渡りぬ。
捷利は到る處に佛國軍軍旗の上に宿れり。
アウストリアは、國力の疲弊に堪えず、幾度か講和の策に出んとせり、然れども英國との盟約を重かりて、容易に佛國の軍門に平和の使を送る能はず、而して精氣烈猛あるナポレオンは、寸時も優柔爲すなくしてあること、のあらぬあり、到底平和の望みあしど覺悟せる渠は、又々ホーヘンリンデンに重圍の陣を張り、またマクドナルド(那翁幕下の將)をしてスパルヤンを横ざらしめぬ。
アウストリアに於ける到る處のムラの大勝、伊太利に於ける佛軍の成

功は遂にさしものアウストラリアをして、其我慢を挫折し、一千八百〇一年彼の有名なるリューチピルの條約に調印せしむるに至れり。慧敏の奇智、超凡の能方、加ふるに、到る處に於てのナポレオン軍の大勝の列國の將相王公をして、一種恭敬の意を持してナポレオンを見るに至らしめ、或る場合に於ては寧ろ佛國に同情を惹くの國すらあるに至らしめたり。

ひとり英國が佛國に對する、深怨深憾のみは抜くべからず。

然れども此の永續せる歐州の大戦争も、終に其終局を見るの期の來れるあり。諸列國の君主民庶漸やくに戦争の煩と苦とに疲るに及び、復雜、躊躇、延滞、の長々しき懸引談判の末、ビネツル、ヒニス「總平和」のエイミンに於て確議せられ、歐州列國再び平和の天を見るに至れり。
一般歡喜の聲は、佛國英國を通トて響き渡れり。

列國の關所々々は、渾べて其鎗鎖を解脫せり。

第二章

列國の新驚荒、奈翁戰略一斑

奈翁滿腹の經綸○佛國の新誕生○英國の嫉妬○英國の新恐慌○英國の條約破壞
 ○吾渠を倒すにあらすんは渠吾を倒さむ奈翁の炯眼○英國公使ウエットウオーヌ
 に寄せたる書翰○詭計猾智○ア、是れ果して誰の罪ぞ○船大工の鎚聲斧響は大
 砲小銃の響と相和して天を轟かし地を撼かせり○英國露國を引入る○其底意○
 平和は佛國の希望する所なり○離左歴々○四ヶ國同盟○詭射猾智争て力を角し
 て相對するこそを得んや○三萬の俘虜に對しての奈翁の演説○佛國は如何なる
 邦なる乎を思へ○奈翁の慾望○第三の虐殺起れり○蓋し隠れり蓋し隠れり○龍
 騰虎嘯○三昧○斷頭機は是れ一の機械のみ○冷酷なる乎○有用の鐵有用の材○
 精金美玉の君子にあらす○曲學阿世の文人詞客○萬有に對し人類の以て誇るへ
 き例證一個を失ふなり、

平和。ナポレオンが彼の如く需め、彼の如く望める、平和は終に來れり。宿
 昔夢寐に往來せる滿腹の經綸は今ぞ遠慮なく、之を實地に施すこと

を得るあり。今ぞ國家の基礎を定むることを得るなり。ナポレオンが才
 能、智力、偏へに内治の一點に向へり。
 商業は漸次回復せられたり。法律は改正ある新衣を纏ふて現はれ來れ
 り。完全ある庠序は市邑々々に新たに設けられたり。
 平和の恩恵は、日々に、戰爭の創痕に惜氣もあく藥餌を澆ぎつゝあるあ
 り。而して其効日に著るし。
 人はナポレオンの驚くべき大經綸と、其の弛みなき勤勞に、只だ噤若と
 するのみ。實に渠は、渠の國家に一新誕生を與へつるなり。ヤ、モすれば
 英國の強大を凌がんとする威勢と氣力とを、渠の國民に吹き込めるな
 り。

唯だナポレオンは未だ之を以て足れりとせず。渠は英國の如く、富饒な
 る殖民地を得て、之を渠の國家に附與したしと望めるあり。而して渠の

希望、恐くは其成功を見るを得たりしならむ、若し渠が此の一事にのみ全力を傾くることを得たりしならむには、然れども英國の倨傲は、又忽ちにしてナポレオンの意を煩はさしめぬ、英國は最初は共和政の感化を恐れたり、而して今は別様の恐慌を得るに及び、佛國共和政が遠からずして、一帝國に變化せむとする、殆んど疑ふべからざるの事實あるが如きあり、ナポレオンは其の繼續者を指名するの權利を有する、終身第一執政官とされり、而して渠の尊大の心、傲慢の精神、渠國民を驅て爾せしむる乎、國民渠の意を承けて渠を強ゆる手は、知れざれど、早晩一帝王となるにあらずんば、已まざるべきは、豫言者を待て、後に知るを要せざるが如きあり、故に英國は今共和政の流行を恐るゝの故あらず、唯だ嫉妬に堪えざるは、佛國急激の進歩あり、偉人ナポレオンに指導せられて、國民の意氣は日に益す旺盛あらむ

とす、百工百藝の發達進歩は、眞に驚くべし、蔑視輕侮せる渠ナポレオンの技倆は、日に益ます、顯はる、此くの如くにして豫想に違はず、渠が帝位に陞る如きことにもなり、あば如何、豈に見るに忍ひんや、豈に見るに忍びんや、手を拱して佛國の隆盛を傍らに見る英國將相の顔色は、如何斷つて堪ふべからず、斷つて堪ふべからず、嫉妬、是れ英國特有の惡質あり、斯る境遇に莅み英國豈に冷然として居らむや、況してや早きに迫んで其の發達を杜絶する、かくむば行く、權勢に於て吾を凌ぐにも至り兼まらざる有様なるに於て、おや、英國は今や故なきに佛國に不和を構へんとす、不和を構へて折よくば佛國の權勢を殺がむとせり、英國は其自から調印せる和睦の契約に示す所の條件を、故さらに取運ぶことを遅延せり、契約の文言中には、英國は埃及及びマルタを棄て、佛國はネーブル、ダレント、及び羅馬の二三州を棄つべきこと明らかに

記されあり、ナポレオンは其後二ヶ月内に條約に示す所を盡く履行せり、而して英國は其後數ヶ月を経過するも尙ほアレキサンドリア、マルタに據りて、其衛兵を撤去することをせず、而かも尙ほ飽まで、平和を保持せむとせる、ナポレオンは一言の詰難を英國に加ふることあらざりしあり、斯る間に英國は遂に公然條約を履行すること能はざる旨を宣言するに及び、條約破棄の唯一の理由とする所は、アレキサンドリア及びマルタは、吾之を棄てむには佛國必らず之を奪奪すべければ、ありと云ふに過ぎず、然れども是れ固より英國の眞意より出でたる言にあらざることは云ふまでもあり、猜忌、嫉妬の二ツのもの、英國をして斯かる暴慢なる所爲に及しめたるのみ、イギリスは英國の此我儘なる舉動に唯だ吃驚せり、ナポレオンは怒氣滿心に沸騰せり、ナポレオンは一瞥直ちに諱認せり、英國の斯る政略に出づるは其意偏に佛國の隆

興を杜絶せんとするにあれば、吾渠を倒す乎、渠吾を倒すにわらずんば、到底兩國の間に和平の天地を見る能はざること、然れども渠は又退きて思へり、戰闘一番以て紛雜煩はしき兩國間の交渉を裁斷するは、快は即ち快ありと雖も、將さに興らむとする佛國の文明の中なるにして、屈折するを奈何、己れ積年の内治の經綸の一策にして、其効を缺くを奈何、如かず、英國をして平和の本心に立返らしめむには、茲に於て、渠は巴里駐逗の英國公使ウットウオースに書を寄せて、會合を求め、自己が熱心ある和親の本意を告げ、本國政府(英國政府)に曰ふに、干戈を動かすの理なき旨と以てせむことを望めり、唯だ條約履行の一事に於ては、渠は一步も退くことをせず、渠はウットウオースに語げぬ、マルタは到底英國之を放ち棄てざる可らず、眇たる彼の一島左までの價値の存する、あるをかしとするも、神聖なる條約あり、佛國の名譽係れり、英國は到底

・正しき道を履まざるべからず。若し、故なくして條約を破棄し、而して堂々たる歐州の二大國にして之を知らざる如き爲するあらば、ア、世界は之を何と云はんと。

ウエットウオースは之を本國に告げぬ。然れども詭計猾智の英國、豈にオマクマルタを手放してナポレオンの言ふ所に従はむや。殊には英國は、長き戰を續けむに、佛國の必らず斃るべきを思へるあり、ナポレオン如何に偉畧ありとも、佛兵如何に精悍なりとも、無限無敵の同盟列國兵の新手を交へて攻め立てむには、終には疲弊困憊して、必らず又起つ能はざるに了るべし。是れ英國政府當時の量見にてありしあり。

露れ渡れる歐洲の天に、再び黒雲漲らむとするなり。ア、是れ果して誰れの罪ぞ、ア、是れ果して誰れの罪ぞ。

罪は佛國に歸すべからず、罪はナポレオンに歸すべからず。神聖なる條

約破棄、是れ再度の大戦の直接の原因ありとすれば、英國實に其罪を負ふべきにあらずや、而して歴史は吾人に何と告ぐる、ナポレオンは怪物あり、ナポレオンは殘酷ある虐殺者あり、ナポレオンは大魔鬼なりと、怪物とは才能の優れたるものを指す、手魔鬼とは勇力の絶倫あるものを表はすの語手、若し當時英國にナポレオンの半分は世の人傑一人ありたりとすれば如何、佛國全土を扯裂し蹂躪し其慘其酷云ふに忍びざるの現象を呈することはあざりし乎、英傑ナポレオンあり幸に佛國の礎となり壁とあり壘とあり溝とありて、豺狼の襲來を防ぎたればこそ、歐州大亂の張本人たるの名目と英國之を遠るゝことを得たりしにてはあざざる乎、而して歴史は吾人に何と告ぐる、渠を怪物と、渠を魔鬼と、ア、誣妄もまた甚だし。

敵對再び始まれり、ナポレオンは直ちに英國を侵撃せんと目ろみたり、

渠はボローニに無数の艦隊を寄せ集めぬ、英群島に對へる海岸一帯、船と兵とを以て殆んど水と陸とを蔽はんとし、船大工の槌聲斧響は大砲小銃の響と相和して天を轟かし地を動かせり。

一方に於ては梟雄英國、先づ其の同盟に露西亞政府を引入れたり、其同盟の辭柄は、革命以前の範圍にまで佛國を押し縮め、斯くして歐羅巴の平和と安全とを鞏固にせんとすと云ふにあり。是れ又、何等謂れなきの同盟の條件ぞや。佛國とカケ離れたる露國は其邦土を安全に有して、曾つて寸地の佛國に褻はれたる例のあらぬなり、曾つて一度も侮辱を受けたることのあらぬなり、將た今後何等不安定の事の今日佛國政略上の傾向に於て認めらるゝある歟。其の歐羅巴の平和と安全とを鞏固にせむが爲めに師を起すとは抑も何を云ふにや。平和は佛國の希望する所あり、而して是れ單に虚しき言にあらざ、其證表は歴々として見るべ

し、見よ、伊太利はアウストリアに屬するより多太の自由と安寧とを得るが故に永く佛國領たらしむを願ふと云ふにあらざや、アウストリアすらも曩きの英國との同盟の煩はしきに懲りて、容易く今回の同盟に加はるを欲せず、戰若し利あらば、伊太利を爾の有とするを得べしとの甘言にすかさるゝに及び、始めて辛ふトて英國と提携するを言ふたるにあらざや、而してプロシヤの如き斷々乎として、英國の誘導に背き、終に佛國と喜びて同盟したる跡を見て、平和安全と云ふ點に於て、如何に當時は佛國が英國に勝りて世間の信用を博し居りしかを察知するに足らむ。英國は實に斯る謂れなき辭柄を以て同盟を形ち作れるなり、英國に誘惑煽動せられて同盟に加入せるもの、英國を合せてすべて四ヶ國、曰く、ルシヤ、アウストリア、イングランド、及びスウェデン。

幾度も幾度も列國の無禮傲慢に堪え忍べる、ナポレオンの大胆も、幾度

とあき列國の詭計隠謀に、今は漸やく猿馬の狂ふを制し難からむとするあり、忍び忍びし憤怨今は一時に潰裂せむとす、今は渠は心の底より覺悟したり、露西亞英國の如き類カキの邦は、其頭を土中に葬らざる限りは何時イツになりても、從順のものとなるの望あるべからず、渠等を征服し抑歴し、其頸邊を握みて呼吸も叶はざるまでに窘束するにあらざる限りは、到底歐洲の平和安全は望むべきにあらずと。ナポレオンの覺悟は實に斯境にまで到着したり、平生如何に寛裕柔順ありとも、體格力量共に拔群なる猛獸の、一たび憤怒して暴れ狂ふに及びては、鬪豺狼イカ爭で力を角して相對することを得んや。

今後に於けるナポレオンの戰鬪の、猛烈凶暴なりしも亦宜べあり。英國との微戰、露西亞との奮闘、或る場合に於ては眞に殘酷無慈悲と思はるゝまでに、活潑峻厲なりしも別に異とするに足らずと云ふべし。

然れども心の秘密は蔽はむと欲して到底蔽ふべきにあらず、渠が平和の愛好者たるの本心は、渠が平和を棄て平和を擲ち血に濁くものゝ如く見せかけたる折に於ても、尙ほ屢々發露して、吾人をして轉だ渠に同情を惹くの度を加え増さしむるなり。

續きて起れる一千八百〇五年の戰爭の始めつ方、マツシマツシ（那翁幕下の勇將）はアルムを征服し、佛軍大捷、俘虜三萬ナポレオンの面前に引据えられたるとき、ナポレオンは其の俘虜に對へて實に下の有名なる演説を試みたり、『諸君、戰爭にはチャンスツネ（奇運）なるものゝ、恒ツネに伴へ居るなり。數々捷利を得んには、又敵より打勝たるゝことをも覺悟し居らざるべからず。諸君等今俘虜とありて余の面前に顯はる、然れども是れ何事にてもあらず、別に諸君等の大なる恥辱と云ふにもあらざるなり。勝敗は蓋し兵家の常なることを知れ、然れども常ならぬ此の勝敗を諸君等に敢

てせしむるものは抑も誰ぞや。余は明白に諸君に告ぐ。余は當時何の爲めに戦つゝある手を知らざるあり。御身等の帝王將相は只だ何の故なくして余に戦を挑めるなり。故なくして戦を挑み、故なくして戦に應ず。是れ蠻人の所爲あり。然れども佛國は一の邦國なり。余ナポレオンは一の兵士あり。邦辱しめらるれば邦は戦はざるべからず。兵望まるれば兵士は戦を抜かざるべからず。佛國及び余は不幸にして蠻人の間に邦を立つれば、時ありて蠻人の所爲に及ぶこと。是れ實に免かれむと欲して免かる能はざる所なり。故に佛國及び余は此點に於て毫毛も心に疚しき所あり。今後如何ばかりの艱苦を見るときも吾佛國は斷つて己れより兵を退くることはあらざるべし。去りながら余は御身等の君王、日耳曼帝に一言の忠言を進めたく思ふ。一日も早く意を和親の方に傾けよ。如何に強大なる帝國なりとも、如何に旺盛ある國家ありとも、傲慢の頂

上は決して好まじき結果の來るべきものにあらず。早きに迨んで覺悟する所あるんば、恐くは不測の災あるべし。佛國は如何ある邦なるかを思へ。佛國人民は如何なる人民なるかを思へ。而して余ナポレオン、ボナパルトは抑も如何なる人物なるかを沈思せよ。吾邦、吾人民、及び余は、高慢にして膽力あき帝王將相の虚喝に嚇され驚かされ得る質のものにあらざることを思へ。蓋し、案ずるに、御身等の君王將相は吾國、吾人民、及び余の力量の程を知らざると共に、吾國、吾人民、及び余の意思の存する所を恐らく誤解し居るなるべし。吾國、吾人民、及び余は、歐洲陸土に多く求むる所のものあるにあらず。欲する所は殖民なり。要むる所は船舶なり。豈に列國の邦土に毫厘の荷むる所あらんやと。

ア、是れ世の偏見者が呼で歐洲の大魔鬼虐殺者の張本とす所。ナポレオン、ボナパルトが己れ大捷戰の其間際（一）に於て、敵軍の兵士に心を

披きて語り告げたる所のものなり。
 實に渠の言ふ所は信なり、實に渠は何の爲めに戦ひつゝありしかを知らざるあり、渠は戦を強むられたるのみ。渠が歐州列國に毫厘の苟むる所ありしと云ふも亦信あり、渠は列國の帝王が其の安閑なる椅子に、晏然として居睡りし居るを更らに妨げんとする意のあらざりしあり、渠の慾望、即ち佛國の慾望、ども見るべきは實に新殖民地を獲んとするにありしなり、英國の慣用得意の手段を佛國にて採採用せむと欲したりしなり。
 然らば如何、マッセナが境界外に敵を追撃せるとき、即ち彼の耳にするのみにて人の戰慄する、伊多利平原の虐殺の如き、抑も誰か其責に任ずべきものぞ。ナポレオンにあらす、佛蘭西にあらす、斷つて佛蘭西にあらす、ナポレオンにあらす。

而して茲に又第三の大虐殺起れり、劍戟の閃き銃砲の聲を以て歐洲大陸の殆んど全天地を、大雷雨の折の如き觀を呈せしめ、病院には手負者呻き、静閑ある村落には飲泣者充滿し、川には鮮血流れ、岡には身首所を異にせる骸堆き、大慘狀、大悲劇なり、誰人か其責に任すべきぞ。歴史は其罪を、全然ナポレオン一個の頭上よ置かんとするなり、ナポレオン一個の私慾より胚胎し來れるものとなさむとするなり。蓋し謬れり、蓋し謬れり。
 露英兩國は、佛國を壓迫し、ナポレオンを倒さる間は、其同盟を解くよしあらず。ナポレオンの炯眼能く之を觀破せり、佛國を渠等の手裡よ渡さるる限りは、佛國は到底渠等の虐待を免かる能はざることを知れり、渠等を壓倒し征服するは、是れ平和を來すの唯一の手段たる事を見たり、渠の眞に平和を望めり、平和を望めるが故に戰を辭せざりしあり、既に

渠の意戦ふに決せり、兵機も敏慧なる渠が如く、書策に富騰なる渠が如く、下士の尊信を受くる渠が如く、能力の萎靡せざる渠が如く、事務に精勤ある渠が如く、而して名譽を尊重する渠が如く、體面を確持する渠が如く、侮辱を甘んせざる渠が如き、世間見ること稀ある自信あり、自尊の氣に心意の昂れる偉人、渠ナポレオン、ボナパルトの如き人傑が、其の一次び歐洲の野に兵を進むるや、恰かも夜叉の躍るが如く、惡鬼の暴れたる如く、神變自在、龍騰虎嘯、人をして其運動の那の邊に歸着すべきやを端睨する能はざらしめ、時には殘虐の行ともあり、時には人の忍ぶべからざる所を忍びて軍勢を驅り、其銳氣の直行直往、到る所に到りても尙ほ餘勢あり、爲めに兵を休むべきに兵を休めず、降を容るべきに降を容れず、直前の境界にのみ眸子の向ふ軌道を驅くる馬車馬の如く、福音耳に達するも聽かず、仁恕心に起るも従はず、只其一事のみを耳にしては、

人をして覺えず、寒戰せしむる無道に似たる所置に及べることのヨシ屢々ありしとするも、ア、吾人は實に其無理あらぬことあるべしと思ふあり、渠に於て多く咎むべき所を見る能はざるなり、ヨシ渠に於て責むべき所多しとするも、渠の意常に渠の國家にありしを思へば、吾人は如何にしても渠を憎惡する事の能はぬなり。

人類を斃すものを厭惡すべき惡虐者ありとすれば、斷頭機は是れ無道の大惡魔なり、然れども機械は是れ機械のみ、木と鐵とより成り、法律之を刑し、執行者之に陪し、始めて斬者の惡行に及ぶのみ、機械に何等邪思のあるにあらざるなり、何等惡意の存するあるにあらざるあり。ナポレオンの運べる戰圖の如き、蓋しまた此くの如きのみ、體面を重むする名譽の高情、國家を愛敬する無二の報國心、技倆を揮はむとする奮勵の氣、之れが木とあり、之れが鐵とあり、列國の忘狀邪計之に執行を命じ、使心

壯氣之に陪し、茲に始めて戦闘なる悪行と遂行せるのみ、若し偉人に敬意を失するを嫌はずんば、ナポレオンは是れ意思あきの断頭機に過ぎずと云ふべきのみ、誰れか之に執行を強迫せるものぞ、鐵たれば鐵の用をあし、木材たれば木材の用をあすべきに、冷酷ある手之を鍊鍛し之を斬伐し之を組合せて、一個無慈悲ある斬首機となし了れるは、如何に不道德無慈悲なることとす。列國若し佛國をして靜穩の地位に安んずることを得せしめたらむには、ナポレオンなる純良精粹ある鐵は如何に佛國人民の意思を堅固にするの利器となるべかりしとす。ナポレオンある良好ある木材は如何に民人の雨露を覆蔽するに足るの有用なる藩屋となるべかりしとす。有用の鐵、有用の材をして強て其用をあさしめず、一個無慈悲ある断頭機となし、而して其の殊虐を罵り其冷酸を責む、抑も何の謂れぞや。ナポ

レオンが精金美玉の君子にあらずと云ふの事は、吾人固より異論あり、然れども歐洲大亂の滲漶無慈悲なりしを舉げて、一に之をナポレオンの肩上に置かんとするに至ては、所見の謬れるも亦た甚し。自國の疵瑕を蔽はんが爲めに、是を否とし、否を是とし、故らに一偉人を讒誣して、愷として顧みざる如き、厚顔破廉恥卑屈怯懦なる曲學阿世の文人詞客は之を措く、一定の識見なく一個の確説なく、世論右すれば右に走り、世論左りすれば左りに馳する、輕薄陋劣の嚆舌は之を措く、苟くも眼千古に通し、少くも一世を達觀せむと心懸くる學者たらむものは、斷々乎として世の多くの誣妄の歴史に、惑はさるべからず、自家の眼孔を以て直觀直察するの大胆と勇氣となるべからず、ナポレオンの如き人物は兎に角に世を曠ふせるの巨人あり、豈に之を謬り見て満足し居るべきならむや。之を謬り見るは、世界の偉人たる需めて多く獲べからざる諸君

の知己一個を失ふなり。否、^{キヤウ}有に對し、人類の依て誇るべき例證一個を失ふあり。諸君の不利、人類の不利も亦甚しからずや。

吾人のナポレオンの爲めに、世人も多きを需めんとするものにあらず、唯だ公平に事實に就きて穿鑿されむことを望むと云ふのみ。

吾人は茲に今ッド、くしく、其事實を列舉して、細評を試むることをせざるべし。又、此の僅々たる小冊子に於て、到底其事實を舉げ盡すべくもあらず、故に歐洲當時の戰鬥の由て起れる根原の一斑を諸君に報せるを以て、満足すべし。

若し夫れ渠の性行、伎倆、智能、才幹、等に至ては、渠を一個虐殺者ありとして見るも、怪物ありとして見るも、大魔鬼なりとして見るも、吾人は満心の敬意と尊重とを以て渠に對せざる能はず。

渠の智能や、才幹や、ア、實に懦夫をして起たしむるものあり、因循

不斷のものをして走り且つ憊れしめんとするものあるなり。

渠の智能や、才幹や、南海に泛々する算數家學で以て則るべし、藝圖に攻究する諸生學で以て則るべし。

國民渠の如く勤勉あらば、豊富ならざらむとするも能はざるなり、國學渠の如く自尊自信の氣に富まば、強大ならざらむとするも能はざるあり。

吾人は邪惡ある政界を絞せる筆を洗ふて、此より以下、偉人ナポレオン、ポナパルトか駭絶奇絶なる才幹、智能、伎倆の一斑を描き試みむ。

内篇

第壹章

奈翁の幼時、特質、駭絶の腦力、駭絶の勤勉

フリエンの學校に於ける頑童ナポレオン○學慮の夢、散策の默想○恰好の舞臺○
 世間果して幾人かある○一軍隊の都督に擧げられし折の高言○成功の目算立た
 ざる事を敢てする如きさる愚かなるものにあらず○二様の反對せる心のハタラ
 キ○渠の心は閃電の敏速を以て驅け回れり○然れども質直鞏固なる道理之に隨
 伴せざるはなし○一飛直ちに最後の終局點に突入す○二者共に最の字を冠らす
 るに足る○綜合統一の力○牛刀、雞肉○冷熱兩所に處する敏腕○古今獨歩の大軍
 人○一歳足らずの短日月○ナポレオン軍法、説明○蓋し絶無ならむ蓋し絶無なら
 む○閃電よりも速か、落雷よりも突如○傍若無人○ナポレオンのナポレオンたる
 所以反對の行爲○死地に投ずるは宛なから輕佻なる青春の徒が其愛好する舞踏
 會に急ぐが如きものあり○其例證○ナポレオンの雄辨○泣音、叫聲○勤勉○不愉
 快○時間の規定○稀有の忍耐力○冷靜

ブリュンの學校に、未だ頑是なき小童たりしとき、ナポレオン平常の行爲は、明らかに、渠が未來の英才たるの徴を表はしたりと傳ふるものあり。然れども、眞とは同儕より少しばかり小才の優れ、高慢に、感情強く、鋭き、一個壯健ある頑童たるに過ぎざりしのみ、何等特に秀で擡むでたる舉動ありしには、あらざるあり。學窓の夢に、散策の默想に、渠は早く己に未來の偉大の事業曠世の經綸を描き出せることありしと云ふ類の云ひ傳の如きも、熱情逆り想像切りに馳する年少者には、珍らしからぬ事にして、其之ありしと以てナポレオンの少時を特に異とするに足らず。唯だ尋常の人、尋常の境遇ありせば、年少の折の銳氣壯心は、歲月と共に銷磨し盡き、中年以後に及びては多くは平々凡々にして已むを常とすなるに、渠ナポレオンは能く其年少の折の銳氣を支持せるに加えて、『革命』ある大事變は有らゆる冒險者に恰好の舞臺を與へたれば、一飛し

て直ちに冲天することを得たりしからむ、即ち年少の折の空想理想を實地にするを得たりしならむ、要するに年少の折に於ての渠の未來の理想の儕輩と大に異れるとに、あらざるあり。

然れども、年少の折の銳氣壯心を、能く何時までも支持し得て世界の戰場に角闘し得るもの世間果して幾人かある、而して渠ナポレオンがたゞに歲月の爲めに銳氣を沮喪せざるのみならず、益す志氣を旺盛にして、死に至るまで雄心勃勃々些しも屈せざりしを見れば、渠の天質決して尋常一様のものにあらざりしことも推し量らるゝなり。

實に渠が少時の氣象を支持し得て、權威勢力の下に容易に屈從せざるの我慢心は、渠が始めて一軍隊の都督に擧げられし折の高音によりても察知せらる。

渠が人生の發程は、巴里の一揆を鎮定せる時より初まれることは、前既

に説けるが如し。而して渠は此の初陣に於て、目覺しき働らきせり。世評は、裕かに渠が尉官たるに足るものなることを認識せり。然れども、市長パーラスの推薦によりて『議會』を防禦すべき軍隊の總督として、渠が紹介せられし時は、諸將は實に一驚を喫することを免かれ得ざりしあり。モーリン將軍は、此の若總都督に告げて曰へぬ『こたびの如き重要な地位を、足下に委任せらるる所以のものは、一に名望あるパーラスの懇切熱心なる推薦ありしに由る』と、少尉官は冷々然として之に答えて曰く『否とよ、今回の任命は余より少しも乞ひ需むる所ありしにはあらず、而して此の任命に接し余が之を賭せる所以のものは、精密に視察して余の力柄裕かに之を措置し得て餘りあるべきを見たればあり。成功の目算、明らかに立ちたればあり。余は他人には何の係はる所あらず。余は成功の目算立たざる事を敢てする如き左る愚かあるものにはあらず』

『傲慢不遜の廣言にモーリン將軍は再び口を開くことなかりき。然れども』成功の目算立たざる事を敢てする如き、左る愚かあるものにはあらず』此の淡泊質實明快なる一言は實に渠がブリエン學校の小童たりし時より、佛國第一執政官となり、終に佛國大帝たるの光譽無上の地位を占むるに至るまでの、奈翁一世の行爲を一貫して、其成功の秘密を説明し得て餘りあるあり。實に渠は年少の折の質直純白猛烈ある意氣を終世銷磨することあらざりしあり。

ナポレオンの能力に就きて驚き感すべきものは實に多々。渠が二様の反對せる心のハタラキの力を兼ね有てるが如き其一あり。渠は快活にして性急なる彼の英國の騎馬武者の如き、熾んある想像と不穩激烈の心とを有せるが、之れと同時に、冷靜沈寂ある彼の軍法家算數家の嚴厲緻密ある判斷力をも有せるあり。

渠の心は閃電の敏速を以て駆け回れり、然れども、質直鞏固なる道理之に随伴せざるはなし。渠は中間の道程を躍り超えて一飛直ちに最後の終局點に突入す、而かも尙ほ途中の一專一物を籠蓋し抱懷し認識しつゝ、行かずむばあらず。渠は敏速に緻密に、百事百物を處決す。而して此の反對せる二様の心のハタラキは、何れも尋常一様のものにはあらずして、二者とも最の字を冠らすに足るなり、即ち渠は事物に最も敏速なるの傍ら、最も精密にてありしなり。頗る先見の明に富み、最も冷靜なる判斷力を有するの人は、多くの決斷の遲緩なるものなり、而して劇迅の判斷執行に鋭あるの人は、多くは一時一事の爲めに心を凝はれて往々歸着する處を見失ふの狼狽あり。ナポレオンの尋常人と異なるは實に茲にあるなり、渠は裕かに此の兩様の反對せるハタラキを一個の心の裡に有して、時と場合により、或は緩、或は急に、百事物を處決せるなり。

り。人事に處しては、情意に勝ちて功を收むることあり、意情に勝すむり成し易からざる事あり、渠ナポレオンの能く此の兩様の場合に應じて、而かも其應ずる手際の最も猛烈に、最も冷靜にてありしなり。蓋し如何に熱沸せる事物も、如何に冷淡なる出來事も、渠ナポレオンの面前に來りては、其熱を冷かにせられ、其冷を温められざることを、てはあらぬあり。

ナポレオン、ボナパルトが綜合統一の力に富めることも、亦實に罕れに見る所なり。込み入りたる軍器、平常の人にしては一見したるばかりにて氣を吞まると、管領廣き軍隊に對する糾紛錯雜なる其軍器も、渠ナポレオンの面前に置かれては、宛ちがら鮮明なる地圖を見るが如くに明白に裁斷措置せらるゝあり、渠糾紛せる亂難界に措置の一點を定め極むるや、恰かも磁石力もて吸引さるゝが如く、百事物皆其の一點に湊合

し、附着するなり、而して渠ナポレオンハ高處に在りて、其百事物の何れの處より來り、又如何ある道筋を取りて、到着せるかを、分明に看取して、如何ある細事微物ありとも、斷して曖昧裡より漠然として來列するを許し容れざるなり、實に渠が冷熱兩所に處する敏腕、駭絶の綜合統一の力、微物を見遁かさざる綿密の注意力ハ、世界の大ききを運轉するも、甚た難義ある事にもあるまじきが如くに眺めらる、況してや、一小争闘をや、況してや、列國の一二の將相と政略の駆け引することをや、渠にありては、蓋し牛刀を把て鶏肉を割くが如くにてありしあらむ、其の小せり合を闘はず折に於ても、大軍勢を統率する折に於ても、渠の熟練技倆に於て些少スユンの差異を見出し難きより推すも、渠の智能のハタラキの無際無限にして、常智の以て量り得るところにあらざるを見るあり。

軍勢の大將としてハ、古代に於ても、近世に於ても、渠は實に獨歩と云ふ

べし。渠ハ殆んど全歐洲の到る處の市府に、其成功せる兵を進めたり。最初は、プรัสเซีย、アウストリア、ロシア、イギリス、國別に兵を角し、一々を征服せるが、後にハ、以上四ヶ國が同盟せる連合軍を相手にして戦争せり。伊太利に於ける渠の最初の出師、及びアウストリアの激戦ハ、渠にとりては最も光譽ある戦争ありき。前者の折に於て渠は世界を驚かし、後者の折に於て渠ハ渠の運命を定めぬ。ナポレオンの戰場期は短日月とは云ふべからざれども、渠が歐羅巴中の最強最鋭の軍勢蹂躞ハ、實際僅かに一歳足らずの短日月間に於て成就せるあり。五萬五千の兵を以てアウストリア二百萬の兵を征服し、渠が軍勢は二倍する員數を俘虜にし、又渠が曾つて引率せる軍勢の數より遙かに超過せる員數を屠殺せるを見れば、一歳間に於て歐洲全土の兵を足下にかくるが如きは、更らに異とするに足らざるべき歟。

ナポレオン、ボナパルトが常用せる軍法は、ナポレオン、ボナパルト獨創、獨得、獨行のものにてありき。從來の方式に従はざるなり。從來の軍法軍理を擯けて顧みざるあり。渠は其方式其軍法其軍理を自家一個の智識の中より拈出せり。渠は新方式新軍法新軍理を發明せるなり。渠は羽翼に對するに、羽翼の兵を備へ、中堅に對するに、中堅の配兵を用意することと止め、精銳を激迅に一處に聚め、時には羽翼を衝き、時には中堅を襲^ハつ。時には閃電落雷の敏速と猛烈とを以て敵の背後に出づ。此くの如くして、渠は羽翼を挫き、中堅を破り、後陣を擾し、順々に一所を破碎し、以て終には全軍を支離滅裂にし了るあり。其中堅に精銳を聚むる時に當りてや、敵の羽翼横さまに吾を襲ふも棄て顧りみざるなり。敵の後陣如何に手薄くして蹂躪し易きも、斷つて吾の一兵を割きて向はしむることをせざるなり。吾本陣の殘兵如何に敵兵の爲めに其寡兵あるに乗つて苦

しめらるゝも渠曾つて與かり知らざるものゝ如きなり。甚しきに至りては、他に勝算あり、シカク一處に精銳を聚め置くは大なる不利にして、之れが爲めに全軍の敗を來すが如き場合に際しても、渠は斷々乎當初の思ひ込みを更むることをせざるあり。其の目當てせる中堅を思ひ通り破碎し了らざる間は、渠は陣軍全局の上には、殆んど盲目なるが如きあり。斯くして、中堅を當初の思ひ通り衝き破り了す。而して其瞬後に渠は倏忽羽翼に移る。羽翼を當初の思込み通り蹂躪し了す。渠は直ちに後陣に突入するなり。而して全軍を覆へすなり。斯くして捷利は常に渠の軍旗の上に宿るなり。それ此くの如く、渠が一方面に向へる間は、渠は實際他の三方面には暗昧なり。所謂三昧なるものなるなり。然れども、戰爭終れる後に於て、渠が戰鬪せる狀を見れば、如何にして、^一時^一處^一に全然渠の心意の注ぎ奪はれ居れりとは見えず。常に全局に其の靈炯な

る眼を放てるもの、如くナガめらるゝあり。是れ豈に渠が運動の敏潑あるによる、常人の推測を以てしての到底考へ及ぶ能はざる渠の靈敏神速なる運動による、即ち渠が一事を果しどぐるの不思議あるまでに速かあるによるなり。見よ、古往今來、戦場の魔王鬼將と呼ばるゝほどの戰士ありども、ナポレオンの如く少時間に於て戦闘の運命を定め得たるものは果して一人にても之れある歟、蓋し絶無ならむ、蓋し絶無ならむ、渠は僅少なる時間内に於て、世にも稀なる大戦争の局を終ふるを常とせるものは、古往今來決して一人もあることなきなり。渠は實に一處に全心全力を注射す、然れども其一處の事を決し了するや、人目を眩するまでに神敏なり、而して其の一處より他の一處に移るや、其間些の空虚を容れず、閃電よりも速かあるあり、落雷よりも突如あるあり。一處より一處に移るに、躊躇なるもの、渠にありあることなきなり、超超ある

もの渠にこあることなきあり。渠は實に一處に全心全力を注射す、渠は實に一方面に向ふときは他の三方面には曖昧あり、即ち曖昧なりと雖ども、其の曖昧にして過さずの間は蓋し驚くべきまでに短時間にてあるなり。渠は此事を知り居らざるよ、渠は此危局を等閑にし置くよ、渠はコ、に氣付き居らざるよと、云ふ間見る間もあらせず、渠は猛然として其の曖昧にして過さずの所に突進し來るあり、隆々然として濶歩横行し來るあり、來りて其の猛烈の威を奮ふあり、其突然あるに愕き、其烈勵あるに消魂するの間もあらせず、渠は其の進闘に終局を告ぐるあり、渠去るよ、渠行くよと指視する其瞬後には、渠は他の大戦場に於て又其の猛烈の大手腕を揮ひ居るあり、誰れか驚かざることを得んや、誰れか驚かざることを得んや、渠が此事を知り居らざるよと見しは謬りなりき、渠が此危局を等閑にし置くよと見しは謬りなりき、渠がコ、に氣付き

居らざるよと推量せるは見謬りありき。渠は何も蚊も知盡して而して
 特らに知らざる爲せるに過ぎず。英雄人を欺くとは渠が舉動の如きを
 謂ふあり。大膽あること傍若無人なりとは渠が舉動の如きを謂ふなり
 と見るもの聞くものをして倦舌戰慄せしむるもの。豈に偶然あらひや、
 豈に偶然ならひや。軍法に於てナポレオン流とは此を謂ふあり。而して
 斯の流義や、渠は戰場に於て獨り之を運用するのみならず、平常の行爲
 又皆亦斯の寸方より出で來らざるはなし。渠一事を經營畫策す、其の事
 の秩然として前に陳せざる限りは、他事に心を移し動かすことなきな
 り。能はざるものは、能はずと確認してそを棄て去るあり。今日に於てす
 るは不可なり。明日に於てするを可とすれば、渠は其當日其事を心頭よ
 り抜き去るあり。要するに、渠は一時に事物に仕ふることをなきなり。其の
 十百の紛雜なる事件を見事に彼れ是れ共に整理して一事に心を凝は

る、如くに如何にしても見えざるは、渠が一事を攪み而して其事を放
 ち遣るの手際の驚くべきまでに迅速あるによるあり。表面よりのみ觀
 察し來れば、渠は一事に全心を凝はる、如きものにあらざると評するこ
 とも能ふなり。一事に全心を捧げて他事を顧みる能はざる猛進家あり
 と品することも能ふあり。此の間の機微は、身英雄にあらざれば察し及
 ぶこと能はざるあり。然り、其の凡眼俗腸を以て量り測る能はざる所、
 は是れ、ナポレオン、ボナパルトのナポレオン、ボナパルトたる所以なる
 か。
 ナポレオン、ボナパルトが勇氣に富めること、又眞に人を驚かすに足る。
 苟くも以て功を奏するに必要ありと認むる時に當り、渠が自己の生命
 を死地に投ず、宛ながら輕佻なる青春の徒が其愛好する舞踏會に急ぐ
 が如きものあり。渠が生活の發程に於て、人目を驚かせる、巴里一揆鎮定

の折に於て現はせる勇敢の行爲、即ち僅々五千の兵を以て、殆んど之れに十倍する四万七八千の暴徒に對持したる其行爲の勇敢、渠が終生曾て渝らざるものにてありき。ローザの激戦に於て、渠實に全軍の總都督にてありながら、彼の危殆なる橋を渡るに、軍中第二の人たりしが如きアニコラに於て、彈丸雨注の眞只中に手に軍旗を把りて屹立して寸歩も動かざりしが如き、ウグラムに於て、一瞬する間に硝兵の手薄にあり、見る／＼全軍の八分以上、敵の屠殺する所とされる、其消魂慘愴の光景を眼前に扣へながら、二分の殘兵の意氣を鼓舞せむが爲め、始めより終りに至るまで、白馬に跨りて陳頭に立ち續けたりしが如き、實に人間業とは思はれざるばかり、人をして屏息膽を寒からしむ。斯の絶倫の勇氣と、又將た渠が獨得の力ある辨舌とは、將士を心折服従せしむる渠が戰將としての特色にてありしあり。一度びナポレオンの陳下に附隨し

ては將士は終生渠を離るゝことの能はざるあり、ナポレオン之を強ゆるにあらす、渠を離るゝは父母を離るゝが如き思を將士になさしむるあり。共和政下の一大將たりし時も、佛國帝王たりし時も、將士は實に同一渝るなきの感情を以て渠ナポレオンに仕へたり。

ナポレオンの辨舌には眞に抜くべからざるの力ありき。之を以て、敗れんとする戰鬪を逆轉して勝戦としたりしこと、其幾回なるを知らず、之を以て、萎靡して又起つ能はざる將士を興奮激厲せしめしこと、其幾回あるを知らず。

カステリグリオンの戰爭の後、リポリ戦争の前、三十九番隊及び八十五番隊に演說せし渠が辨舌の功果の如何に大ありしかを見れば、人は零ぼ渠が一枚の舌の如何に勢力あるものあるかを知るとを得む。當時渠の軍利あらず、將士の膽氣一刻一刻に沮喪し果つるの狀あり、一二將士の

臆病より立脚の地をすら失ひむとするの危機に迫れり。大將ナポレオン此時以上に記せる兩隊を二行に並列せしめ、頗ふる冷淡なる音聲を以て之に告げて曰く「將士、將校、兵士、各位、各位の勇力を揮はず、勇氣を示さず、軍神に侍する敬意を缺き、光譽ある軍旗を汚辱す。各位は、英國の兵たるべし、露西亞の兵たるべし、アウストリアの兵たるべし。斷つて吾佛國の兵たるべからず。佛國の兵たるべし、斷つてナポレオン、ボナパルトを頭上に戴くどころの軍陣の兵たるべからず。各位は、各位の軍旗に特筆大書するこそよけれ」吾等はナポレオン配下の兵士にあらず」と斯くすること各位の爲めにも善かるべし、余に於ては固より各位を統率するを好まず、否、統率すること能はず。何となれば、余はナポレオン、ボナパルトなればあり。余は勇氣を揮ひ、勇力を顯はし、軍神に侍する敬意を備へ、此れまで光譽ありし軍旗が、今後イツまでも同一の光譽を保持せむ

ことを希ふどころの、佛國のナポレオン、ボナパルトなればなり』云々斯の冷淡簡畧あるナ翁の辨舌が、之が聽者をして如何に感動かせしめかは眞に想像の及ぶ所にあらず。將士、將校、兵士は今の皆一齊に渠等の規律を失ふたり、行列の順に氣附かずありぬ、吾先きに抜け懸けして、ナポレオンの四圍に環立し、泣音叫聲を擧げて哀願せり「尙ほ一度、唯だ一度、吾等を驅て戰場に走せ赴かしめよ。而して果してナポレオン、ボナパルト配下の兵たるに愧づるや否やを、尙ほ一度試験せよ。多く需むるところあるにあらず、唯だ一度にて足れり、唯だ一度……唯だ……」ナポレオンは温言もて、之に應じ、將校、兵士の需むる所を容れ、其言の偽りあきや否やを驗して、後に如何様にも措置すべきことを約せり。斯くて數日ならざる中に、ナポレオンは自己の將校兵士の、生れ變りたるが如きを睹たり、渠等は饗宴に赴くが如くに喜び勇んで戰場に赴き、前軍

倒るゝも其倒れたるを超えて進めり、後陣襲はるゝも首を回らして顧みることせず、脚撃たるゝも匍匐して進めり、右腕断たるゝも尙は左腕の劔と銃とを放つことをせず、渠等は比類なきの勇氣を示めせり、絶倫の勇力を揮へり、斯くて那軍の全敗を翻へして全勝を獲たり。歸來せるとき、將校兵士はナポレオンの面前に立ちて曰く「斯くても御身配下の兵とさすに足らざるか」と。

ナポレオン演舌の効果の、凡そ恒に此くの如し。而して渠が戰場に於て兵士に對する演舌中に、必らず下の如き警句なきことゝてなかりき。曰く「御身等勇敢に戦はんには余は生を食らひ若し然らずんば、身を硝烟の中に投じて今にも果てむ」と。ア、此れにも優して、大將が其兵士に對する『愛』と『信』とを言説するの言辞ある乎。

ナポレオンは眞に辨者と評するを得、然れども斯の辨や、恒に渠の肺肝

より出で来るもの、文と辨との信なくむば、以て立たずとは、ナポレオンに於ても之を見るあり。

ナポレオンが名を後世に垂るゝ所以、渠が心能肉體共ニ強健絶倫にして、疲勞と云ふ類の味は、渠曾て嘗め知らざる如きもの、明らかに其原因の一なるを見る。

一の戦捷も、以て、渠を瞬間の安息に誘ふこと能はざるあり、美觀美味、以て、渠を勤勞界より引出すこと能はざるあり、一の成效も、以て、渠の高慢ある事業の願慾を束縛すること能はざるあり、數日を要する仕事を、數時間に於て成就し了れる後、尙は渴虎の餌を、求むる如く、手を着くべきものは、あさかど、己れの身邊を見回らすなり、帝位に陞り、臺閣に政を聽くの時、及びても、渠は尙は其の深く遠き思慮と、其の疲勞なき勤勉とによりて、闔朝の者を愕かせり、朝中の儀式と禮法とに、渠の已むなく其

の食ばり樂しむ一日の邦家の經綸畫策より辛ふトて一時間の時間を割きて與へぬ。渠曾て云へることあり、閣臣侍従が意味あきの叩頭を睹悠然手と心とを緊縮し居る時は、余にとりて不愉快ある事ゝあらずと、是れ蓋し渠を欺かざるの言ならむ。渠は一晝夜の中僅かに四時間を睡眠に假せり、此の定めハブリエン學校の生徒たりし時も、兵士たりし時も、都督たりし時も、大將たりし時も、帝王たりし時も、即ち死に至るまで、渠が渝えざるの慣例ありき。渠一省一部の臣僚と評論討議終日す、渠等の困憊せるを見ては、則ち他の一部の臣僚を召して、時には曉に及ぶまで命令を下し又奏上を聽く、而して終日終夜の間少許の時間を安息に、安樂椅子の上に於て與ふるのみ。渠は通常午前二時に床を出で、それより二時間閣臣と談義し、次に、二時間を裝服と浴湯とに與へ、其の裝服し浴湯するの間を渠ハ独自の熟慮に供するなり、斯くて朝餐を了り、

後ち朝に出づ。然れども、是れ平常の場合に就きて云ふのみ、若夫れ仕事の少しく込み入り來る歟、外交事件の起き居る場合等に當りてや、執務と安息の定め如きモイツの間おか風の如くに飛び去りて、渠は終日終夜働らき續くるあり。渠が埃及より連れ歸れる愛僕ラヌマンが、時より時に至るまで運びつゝくる咖啡のコップを傾けつゝ、身に寢衣を纏ひ頸邊に絹の手巾を着け、夜より夜明に至るまで、夜明より又夜に至るまで、部屋の中を往きつ復りつ、復りつ往きつして、歩みながら臣僚に百般の處置を命じ續くるなり。時ありて、渠が不穩の心は、夜半俄爾床を蹴り起ちて云ふめり「デアルブ(邦翁の相)を呼べ、誰れを寢室より起し來れ」と、斯くして燭を剪て事務に執掌し始め、天明まで働らき續く。渠は同時に、三個の臣僚を並べ置きて、交るゝ重要な評議を運び能ふ、渠の心はシカク敏捷にシカク渠の意の行くところに従ふ、渠ハ手にすべき

業務を一時間とは遅滞せし例タラシあらずと傳へらる。天は此の偉人に圓滿充分の發達を遂げさせむが爲め、人間に與へ得らるゝ限りのものを寵贈し、除き得らるゝ限りの障礙を渠の進程より除きくれま如く見ゆる外に、更らに渠に稀有の忍堪力を贈與せり。實に、天は能力界に於て完全ある人間の摸型を示さむとて、渠を作爲し渠を降天せしめしものゝ如く見ゆるあり。第一伊太利戦争の砌ヒキ、渠は少しく病ケひ氣ありしにも關らず、數日間に五頭の馬を乗り倒し、六晝六夜の間一度も長靴を脱ぎたる事なく、無論寢處に就けることゝてあかりき。渠は埃及イジプトの燬く如き沙漠を踏むも、露西亞の身を斬る如き寒風に櫛るも、共に同トき平氣を以て軍を率えぬ。渠はタイレリーの宮殿にも眠るあり、負傷者に圍繞され斷ゆることなき苦しげある呻ウレめき聲を耳にしつゝ、荆棘の裡鹿布一枚を纏ふのみにてダニユー河畔にも眠るあり、其

に同一なる、冷靜の心を持して。

渠は時として一日十八時間を馬上に消することあり、而かも心氣精神毫厘も衰えず。夜半に及ぶまで進行し、月光の下に兵を整へ、翌終日戰鬥し、夜に入る頃はひ、凱歌を擧ぐ、而して些の休息なく、翌晝翌夜進軍し、其明くる朝又第二の戰鬥を挑み、又第二の凱歌を擧ぐるなり。

ナポレオン、ボナパルトは、運命の寵兒として屢々人に稱えらる。然れども、全世界の上に於て、誰か渠の如き猛心雄志を有し、其猛心雄志を縦横自在に運用するの熟鍊と勤勉とを有し、其熟鍊と勤勉とを裕かに支持するの壯強ある健康を有する渠が如きもの、果して一人にても之ある歟。運命マ、渠を爲れるものもあるべしと雖も、多くは渠自から運命を爲れるなり。偉業は渠が手を伸へて櫻める所のものあり、功名は渠が水火となりて働らける結果なり。

豈に運と云はんや、豈に命と云はんや、誰か天の自から助けざるものぞ
しも尙ほ之を助くと云ふものぞ。

第二章

奈翁の自信、自任、性急、政治、政畧

渠は儼オキツかなる信仰を以て偏へに獨自一個に頼れり○他人にありては狂に似たり
渠にありては大智識たり○ツィロンの園みに際しての渠の方寸○複雑なる事業
冷靜なる分別○渠は危殆の何物たるを知らず○同一なる自信を以て佛國の帝坐
を翺翔せり○同一の着眼○己と競争すべきものは世界の大の一あるのみ○平民
王○俄爾猛烈驟起せり○軍族アルプスの峻崖に懸る○砲聲ダニューア河畔一帯
の地を震蕩す○驚を咒詛するの隱語○絶望的の猛進○確信確任○眉軒らす目ま
じろかす○不穩熱躁急病○渠は騎馬に巧みならず○ソレ馬○舊信は其まゝ途上
に投げ棄つ○而かも渠ハ威儀を失はず○地圖は渠の熱愛の伴侶たり、燭光燦爛○
天下の一奇觀○マリールイストの婚儀の折○渠の一大缺點○渠が憤怒に堪えざ
るは眞實にあらず○大軍師大戦將たると共に大政治學者大政治家たり○勇者と
してはシーザルと均しく政治に於ける聰慧よ於てはベーコンに優り、手腕に於て
は列國帝王顔色なし○富は貧の前垂より流れ溢れぬ○六ヶ月間の休戦○利を以
て露國に喰はす○プロシヤを吾同盟に加ふ○デンマーク、スウーデン諸國との同

盟○有名なるホーヘンリンデンの大戦

ナポレオン、ボナパルトが事業を成就するに、大なる助けとされる、又他の一個の特質は、渠が自信に教さくこと、是れあり。如何なる出来事に應ずるにも、渠は儼かなる信仰を以て、偏へに獨自一個に頼れり。他人にありては他人を求めて評議を凝らすの要あるとき、渠は渠一己と評議せり。世の多くの王公帝者が、帝位のまわりに隨從する、廟臣朝士に其の心配ある耳を傾くるの要あるとき、渠は自個の偉大ある『才能』を召見して、其の奏聞する所を領き聴けり。是れ、自負より來るにあらず、虚想より來るにあらず、渠實に自己の力に確認する所あればあり。渠は己れの身邊に接近する、各人の才幹、度量、伶俐、を量り知るの明あると共に、自己が各人の遠識の達する所を超えて、更らに遠隔の地を分別達觀するの聰と明とを有するものあることを、確認せり。豈に他人の明に頼るの要あらむ

や、豈に自己に頼ることの已むを得むや、他人にありては、渠の斯の柱ぐべからず、技巧ぐべからざるの自信は、殆んど狂に似たり。渠にありては大智識たり。

ナポレオンの圍に於て尙だ乳臭兒に過ぎざる渠は、數多き老將輩の畫策を嘲けり笑ひ、渠等を驚かせる緻密と精確とを兼具せる、暴徒鎮撫の自家の方寸を言説せり。渠の方寸の示す所に隨ふて、渠が首尾能く鎮撫の功を全ふせる曉き、老將輩は始めて、渠の自信自任の空しからざるに驚嘆せり。渠をして、コ、に止まらしめば、是れ、偶然の成功の伴ひる、壯心壯氣の激發せる、一の偶然なる事功に過ぎずとして、人をして侮づり語らしめむ、然れども、渠が爾後閱歷せる道行、長くして複雑なる事業、冷靜なる分別と精微なる認識とに頼るにあらずむ。到底勝を制する能はざる、其道行、其事業の終始、吾人は、恒に渠が自己の幫助に自己一個を招く

の外は、何人にも商議せず何人にも指示を受けずして、堂々濶歩横行し
進み續けたるを見るあり。

經驗多からず齡尙^{トシ}若き渠は、規律整はず糧食饒かならざる伊太利の
軍勢を引率することを敢てして、毫も恐懼の色なく、敗軍の已むべから
ざる場合にはヨシ敗軍するとても其の非難嗤笑の痛苦を幾分か緩^{ユル}ぶ
るを得る、即ち自個の責任を輕ふするを得るの利益ある、本國の措配先
輩諸將の指導と受くるを避け、勝も敗も苦も樂も、全然自家一個の肩上
にあらむことを希ひ、敢爲の地の濶く前途に開けたるを喜び、避くべか
らざる百艱難の今にも渠の軍に墜落するの岌々手たる危殆を、渠は殆
むと忘れたるものゝ如くありき。而して此軍渠に利あり、政府國民皆な
渠の大膽、其の大膽と貫ぬき通^スせる大腕力に驚異し、ナポレオン軍を進
めて勝つ能はずむべ、鬼神と雖どもそれ之を奈何ともなすきけん、と叫

破せしめたる後に於ても、即ち敗るゝも其責來らず、指示を受くるも何
人も渠を怯と呼ぶかかるべき後に於ても、渠ハ其責己れ一個に歸する
の事にあらざれば、敢て足を投ずることをせず、安樂を疎むトて艱苦を
甘しとし、必勝の地を避けて、求めて危殆の地に就けり。ア、是れ豈に渠
の自信の致す所にあらすや。

同トき自信を持して、渠は佛國の帝坐を翺翔せり、其重さには全然無頓
着あるが如く、頗^{カク}ぶる輕々しげに大帝國を提さげたりき。其の炯眼の一
瞥を以て、帝位のまわりに簇集し壓迫せるモロ^クの厄事難事の廣狹
深淺縱横高低を仔細に看取し、其の仔細の觀察を遂げたる後に於て
は、國內鼎沸の混亂を見る、宛^ナながら蟻螻の食を獵^アるを見るが如くなり
き。

渠は百事物を看るに恒^{ツネ}に同一の眼を以てす。渠は敵あるを知らず、味方

あるを知らず、渠と競争すべきものは、唯た世界の大の一あるのみと、確
信せるものゝ如くに見ゆ。

森儼に明晰に自國々々の人々の語るよりは、寧ろ遙かに流暢ある語調
を以て、渠は英國帝、露西亞王、アウストリア王に、自由自在に應接對談せ
り。平民王の無遠慮なる應對ふりに激怒して、否、寧ろ驚怖して、如何に渠
を措置すべきかを評議せむ爲め、王冠着けたる頭の俄かに一處に鳩ま
れり。マイレリーの庭に、吾軍目懸けて進み來る暴徒の一群を眺めたる
と同様ある胸臆を持して、己の帝坐に迫り來る列國帝王同盟の軍を渠
は冷々然として打ちナガめぬ。

斯の單獨の人物、斯の平民王は、歐州諸帝王の環立せる其中央に屹立し、
シバシ左視右顧するよと見えしが、俄爾猛然驟然せり。恰かも路傍の沙
礫を踏みに卜るが如くに、戰車に駕して列國軍勢の頭上を乗り廻せり。



間斷なき大砲の響を以て、列國帝王の耳を聳せしめぬ。餘勢溢れて埃及
に及び、ピラミットの四邊に砲聲高く響くを、列國帝王は戰慄して打聞
けり。斯の間も、渠等は渠の軍勢のアルプスの峻嶺に懸るを見たり。
アルプス峻嶺の突如とせる軍勢の、又忽焉として滅せるよと、見る間、指
す間も、あらせず、爆々轟々たる砲銃の響の、ダニューブ河畔一帶の地を
震蕩し、絶巨絶猛の兇鷲は、アウストリア帝國主府の上に、其恐るべきま
でに大なる羽翼を揮ひつゝあるあり。ナポレオンの軍旗は、今はライン
河岸に翻へるあり。今はボリスセンヌ川頭に翻々するなり、而して又忽
焉としてモスコイ火焰の唯中に眺めらる。歐羅巴は未だ曾て斯くまで
に荒らされ踏まれ蹂られたるメメシのあらぬあり。ナポレオン、ボナパ
ートある一語は、魔を呪詛するの隱語となりぬ。ナポレオン、今其軍所に
在りとの報の敵陣に傳はる其瞬時に於て、勝利の神は佛國軍勢の上に

宿るあり、渠の爛々たる眼光の今吾軍に向つて閃めけるよと臨かる、
と共に敵兵の腕臂は痿痺し、陣伍は亂れ、干戈未だ動かざるに、意氣は既にナポレオン軍に呑まる。ナポレオンは蓋し常に自個の兵を以て勝つ
と共に、往々自個の名を以て勝てり。

以上に記するが如き形以上の勢力を渠に與ふるもの、亦實に渠が自信の篤きに因らすむばあらず。渠の行軍の、何等の算用なく、何等の企圖なく、唯だ偏へに絶望的に猛進するもの、如く見ゆる時に於てすらも、敵兵は見て以て『勝算歴々渠の胸中に踏かるものあるあらむ、其の吾等が望見して何等の謂れなしとするは畢竟吾等の不明に坐するのみ』と臆断せしむるに足るまでの確信と確任とを以て渠は己の軍を行るあり。斯る狐疑を胸底に藏むる敵兵は、其の戰鬪の方針に於て勢ひ躊躇逡巡せざるを得ず、方針既に動搖せむには、紀律正しからむとするも得ず、軍

威振はんとするも望むべからず。茲に於てはナポレオン軍、捷を得ざらむとするも亦得ざる能はざるべし。

世に莊儼あるものは多しと雖も、渠を壓伏し渠を打撃せんとするの唯一の目的の爲めに、劔戟を磨き砲銃と装置して、些の間斷なき歐洲全大土の同盟軍の其中央に安坐して、心胸冷靜、眉軒らす、目まづろがざる、ナポレオン、ボナパルトの此の自信自在の強且ツ堅なるにまさりて、更らに莊儼に、更らに雄々しきものは、そも何の處にあるべしとするぞ。眞個に是れ、駭絶又奇絶と謂つべし。

自から信ずる此くの如く厚く、自から任ずる此くの如く重き渠は、身死地に入りて冷々、百萬の兵前に陳するも自若、是れ固より其分にして異むべくもあらねど、異むべきは、渠が一方に於ては此くの如くに沈靜なるに引替へ、他の一方に於ては實に驚くべきまでに不穩不靜、若し卑野

の言辭を嫌はずんば、躁狂とも云ふべきまでに、心氣舉動共に騒がしく落付かざること、是れあり。臺閣の上に立ちて衣冠を着け居る時も、戰陣に臨みて戈を枕に眠り居る時も、渠は常に不穩熱に胃され居るあり、躁急病に罹り居るあり。一瞬間たりとも心氣を靜穩にし居ることは、渠には到底能はざるなり。疾驅する馬も、渠の躁狂には遠く及ばず。渠は騎馬術に巧みならず、而かも、最も勇敢老練ある馬乗手が敢てせざる、高牆鏖間を跳躍するを最も好み、其の平野に緩々として馬を驅る如きは、最も不愉快とする所、其の己むを得ずして、偶々此くの如き場合に臨むときは、右手をもて馬腎を始めより終りまで敲きつゞけ、衝きつゞけ、馬脚の運緩なるに焦躁イラチドホ通して、四圍の光景に目をくるゝ、あんなの事は、一瞬の間ありとも能はざるなり。若し夫れ、到着すべき時刻に、戰場より通信來らず、而して己れ出發の期、それが爲めに豫定せるよりは十分内外

を後らしたる時、あんなに於て、其待遠しさに堪えず、『ソレ馬』と狂呼する渠の疾聲は、侍者従者に電氣的の刺撃を與へ、一瞬の間に、渠の乗馬は、疾驅の頂上にあり、扈從の一群も、後ればせながらに、尙ほ五六分の後には、疾風の如くに道途を飛行しつゞく。斯くして、渠は些の休憩なく、驅け続けに驅け走り、地平線上の遠き彼方カキに、使者ども見ゆる一點の黑影の微かに認めらるゝに遇へば、渠は一騎後従前驅を驅抜けて、前程に乗り飛ばし、衝き倒さむばかりの勢を以て、使者の馬頭を抑へ、使者の懷中に手を入れざるばかりに、急はしく書信を覗へ、封皮を切り、一言一句なく、一呼吸の間に、文言を読み終り、あどは従者の拾ふに任かせて、書信の其まゝ、途上に投げ棄てつ、再び又疾驅しつゞけ、二度目の使者に遇へ、三度目の使者に遇へ、終に待受けたる通信だけは、盡く読み終ることを得たる。其瞬後には、渠の馬首は、ハヤ其方向を轉ト居るあり、渠は兼ねて行

くべしと定めたる地に進み向ひつゝあるなり。斯る有様なれば、扈徒のものも時としては渠の行方を見失ひ、荷且にも佛蘭西大國の大帝王たる渠ナポレオンボナパルトが、只一個にて、兵士の屯在せる陳營に突如として、其形體を顯はすことすらも間々稀ならず、而かも渠は渠の威儀と失はず、其將士に對し、其將校に對し、其兵士に對しての、應對ぶりの崇重の裡に、款曲を兼ねたる、彼の狂驅の後にして、如何にして斯くばかり、丁寧ある態度を持することの能ふものか、人をして呆れしむるものあるあり。是れ又ナポレオンのナポレオンたる所以あるか。

陣中に在ると宮中に在るとを問はず、地圖と實に渠の熱愛の伴侶たり。寢殿の中、戰場のテントの下、朱點黒線書入かんを以て、原の畫線をかすすばかりの大形の戰場圖は、晝も又夜も、渠が坐邊の大卓の上に擴げられあるあり。夜は其の地圖の四邊には、燭火燦爛たり、何時目覺むると

も、渠は直ちに其の好伴侶と談議して、些の寂寞を感せざるなり。渠途上に在り、急に地圖を見んと思ひ立ちては、道の遠近を論せざるなり。場所の如何を問はざるなり、急使を陣屋に馳せて一幅を齎らし來らしめ、時としては馬上に於て、時としては地上に繰擴げ、砲聲地を震ふも驚かず、咄嗟の聲天を轟かすも動かす、眼前の戦闘などは殆んど忘れたるもの、如く恬然として之に見入るなり、兵急ならざるを得ず、吾軍一瞬を空ふするを得ざる場合に際しては、渠は引率し來れる軍兵を先きに打立たしめ、己れ一個曠野の中に地圖の上に身を躡かまらし、繰返し繰返しナガめ入りて、身邊近く敵兵の迫り來るに遇ふて、始めて蹶起し、其の愛好の伴侶をすら後に殘して打立てる例すらもあるあり。絶巨の偉人ナポレオンボナパルトが、舉動の急躁と心意の執着力との相衝突して、狼狽するの態は、實に天下奇觀の一たるを失はず。

渠が性急の如何なる度にまで時ありて進むかを知らんと欲せば、渠がマリー、ルイスの婚儀を遂げたる状態を見るに如かず。マリー、ルイスはナポレオンに會せんとて約束の場所に馬を驅りつゝありき。當日雨あり、雨中に覆オホヒをもなさで疾驅し來る一輛の馬車あり、是れナポレオン、ボメパートあり、渠は帽子外套ビシヨ濡れに濡れ、眼メヤクのみパチつかせ、此方を睨みつゝあるよと見えしが、マリーの馬車よと一聲すると共に、已れの馬車より飛び下り、急走し來りマリーを其車上に抱擁し、同時に御者を叱して急劇に馬を驅らしめ、斯くて合歡も未だ全ふせざるに先だちて、婚儀の大禮を舉げんことをマリーに迫り、馬車の急驅の間に於て遂に其承諾を得たり。即ち前後僅かに二十分内外の間に於て渠は一切の事を了れるなり。ア、是れ何等躁狂の所爲ぞや。

ナポレオン、ボメパートが、自信自説を貫ぬき通さんとするの確執力と、

不穩不靜の舉動の躁狂とは、時ありては渠が成功に意はざる偉大の勢力を與ふることありしとは云へ、此の二つの者は、渠が一生の行爲中、屢々渠に拭ふ可らざるの汚點を加えんとし、又實に加えたる痕の歴々として數ふべきを見る。殊に、將士將校にして己の命を全ふせざる折に於て、渠が渠等を呵責するの酷あるが如き、到底渠の一大缺點たるを免かれざるあり。忿情の高潮に在るの時に於ては、如何ある分疏をも渠は耳にすることあらぬあり、如何なる已むべからざる事情を開陳するとも渠は斷して其言を容るゝことをせざるなり、唯だ數時もしくは數日を經過して、漸やく平常の渠に復るに及び、無邪氣に曩きの日の常からぬ言行を悔ひ、呵責せる將校將士に詫言ワゴトして、纒かに渠等の歡心を失はざるを得るのみ。それ此くの如くあれば、人をして往々、渠は『眞實』に盲目なるものなりと叫ばしむるに至る。然れども渠が『眞實』に盲目なりと云ふ

は非あり。渠が憤怒に堪えざるは『眞實』にあらず。渠の企圖の全くなる能はざりしを憤怒するなり。誠を告げて詫らるゝを渠は耳にする能はざるにあらず。事情の如何に關せず己れの命令の行はれざりしを泣き悔むあり。然れども、要するに是れ渠が缺點の一たるを免かるべからず。吾人は曲言して渠の非を蔽はんとはせざるなり。

ナポレオンは、大軍師大戦將たると共に、又實に大政治學者大政治家たりき。謫居に於て折々に口より洩れたる渠の政治論の如何に精通該博ありしかは世人の舉げて之を知るところ、而して極亂極雜の紛擾界より能く秩序を握き佛國一時の彼の魔界を反正したる手際の程を顧みれば、渠が政治上の手腕の程も察せらるゝあり。渠は單に目の人たるのみならず、又實に手の人にてあるなり。理想を抱けるの人たるのみならず、能く其理想を實行するの人にてあるあり。

勇者としてはシーザルと均しく、政治に於ける聰慧に於てはペーコンに優り、手腕に於ては列國諸帝王を合せて渠に匹するも尙ほ諸帝王顔色なし、眞に渠は巨人あり。

渠が大政治學者、大政治家たるを證するに、多く云ふを須るす。本國の變事に驚き埃及より歸來せるのち、僅々一歳有半の間、如何に渠が内外の事務を處辨せるか、其模様の一斑を一瞥せば、以て足りあむ。

共和政府が到る處に於て敗を蒙むり、其掌裡より伊太利を零奪せられ、國勢日に危殆ありとの報に接し、渠は直ちに本國に向ふて航し、神變の舉動に出で、英艦隊を韜まし遁れ幸ふとて佛國に歸着せるは、是れ十月の事あり、而して僅かに一ヶ月を隔てたる其十一月に於て、渠は時の閑味不斷ある第一頭領執政委員を黜け、權力無際無限なる第一執政官に上れり。渠は直ちに同盟せる列國と複雑なる談判を始め、同時に國力

國勢の回復に其全力を注ぎぬ。政府の信用は漸々に回復せられぬ。公債は頗ぶる容易に募集されたり。軍用は日に充たされたり。ペンションに於ける戦争は鎮定に歸せり。憲法は制定せられぬ。斯くて翌年の春の初めに於ては、佛國は、戦争、平和、孰れありとも擇べよと、同盟列國に向ふて大膽にも申し出すを得るまでに、國力國勢の回復を見るを得たり。渠が一指を投ずると共に混乱より秩序浮べり、渠が其の大手腕を措くと共に佛國政府は大磐石の上に立てるが如くに確乎とありて此れまでの絶ゆるざる動搖を已めぬ、富の貧の前垂イデより流れ溢れぬ、大資本は大缺乏の冥界より躍り出でたり、今は佛國起て而して戦ふべし、列國同盟軍の覺悟は奈何に。

列國同盟軍は戦争を擇べり。

僅々七ヶ月の間に於て、佛國の面目を以上に記するが如くに、回復し得

たる、ナポレオン、ボナパルトの大脳力大腕力は、今は國外の廣場ヒギンズに於て動き働かむとす、渠は幕下の雄將マッセナをセノアに送れり、而してセノアに於てマッセナ大捷を獲たり、渠は黒林ブッ、キレストを零せしむが爲めムラをスワビアに派遣せり、而してスワビアに於てムラ實に其任命を全ふせり、而してナポレオン、ボナパルト渠自身は列國王公軍師の凝視の中に、其の精銳の兵を提げてアルプスを急轉直下し、唯だ一撃を以て敵より伊太利を奪ひ回し、尙ほ餘力を以て歐洲全土を狂ひ廻らむとす。列國の軍勢は皆其膽を寒からしめぬ、列國の帝王は盡く戦慄恐怖せり、列國の將相は渾べて休戦和議の言辭を其口頭に上さるはあし。

斯くの如くして、六ヶ月間の停戦條約、敵味方の間に締契せられたり。不屈不撓の渠ナポレオンの精氣雄力は、停戦の約と、のへると共に、其戦闘に運用せる雄才偉略を、糾紛錯雜ある、列國交渉の政略の上に傾瀉

せしめぬ。此際に於ける渠の謀略は、如何に渠が政略に富膽ありしかを證するに足るなり。先づ第一露西亞に食はすに、將さに遠からずして英國の掌裡に歸すべき運命を有する彼のマルタを露西亞政府の下に附屬せしめんことを以てし、斯くして露英兩國をして、隱々裏互へに敵意を生せしめ、又同一の手段に出で、ハノバルをプロシヤに約束し、以てプロシヤをして英國との同盟を擯け、終には自國と連合同盟するを甘諾せしめぬ。同時に又デンマーク、スウェーデンの諸國と同盟して、英國に逆ふて大陸重要な港口關所を封鎖せり。此くの如き深謀雄略を巧妙に運用して、流石の英國内閣を波瀾層々の急濤の上に漂蕩せしめ、其の曾て吾に吞ましめんと用意せる苦ニガ杯サカヅキを、こたびは渠の唇に押し付くる快絶愉絶の復讐を遂ぐるの傍ら、渠は又國內の整理整頓に懈る事あらざりき。佛蘭西銀行を創立せり、アルプスに途を拓けり、收税法を更改せ

り、教育法を制定せり、徵兵令を確定せり。——ア、何等雄大ある渠が功德の大記念ぞ！

而して凡そ以上の内治外交に渠が力を盡せるの間は、僅々六ヶ月の間に過ぎず。ア、誰か渠を政界に乏しきものとするぞ、誰か渠を内治の術に巧みならずとするぞ、誰か渠を戰場の上の人のみとするぞ。

六ヶ月は過ぎたり、停戦期は終はれり。

有名あるホーヘンリンデンの大戦次で始まれり。

佛國は破竹の勢を以て、到る處に打勝てり。

アウストリアは意氣萎靡して佛國と對峙する能はずなれり。茲にリュイヂピルの平和の條約とあり、歐洲シハシ平和の天を見るに至れる次第は、第一章に於て既に説くところありたる如し。

第三章

奈翁の道德、慈悲、死時

奈翁とマシントンの比較○渠は武人なり○渠は殘酷なる惡魔にあらず○兵士に對しての慈悲○渠が生涯中の一大汚點○決意○イルバの脱走○國民の歡迎○流離中○死時、風雨、慘澹○編纂者が奈翁に對しての所感

ナポレオンが才幹智能は、世界既に定論あり、此點に於てのみは、渠は他より謬まり見らるゝの不幸を免かる。

渠が才幹智能のはとは、前章に於て畧ぼ其一斑を描寫し了れり。吾人は、此れより少しく渠が一個人としての道德モラルの上に就て見む。

批評せらるゝ身としては、渠は如何にしてモラルも福分多きものと云ふべからず。一個人としての道德モラルの點に於て批評せらるゝに、渠は又また頗ぶる酷に過ぐるの鞭撻を世の多くの史家より受く。

渠が慾望アムビション多き者ありしことは、固より疑ふべくもあらず、然れども、渠と時を同ふせる列國の帝王將相は如何、渠より寡慾ありしと云ふを得る歟、渠より邪計を行ふこと尠かりしと云ふを得る歟。

例を遠く引くを須めず、試みに英相ピットを渠と對照し見よ、政治家として英國政界の一名花と稱えられ、ナポレオンと時を同ふし、ナポレオンと政治の權謀を競ひ争ひる、渠ピットをナポレオンと對照し見よ。

ナポレオンは慾望アムビション多きものあり、ピットも亦慾望アムビション多きものあり。ナポレオンアムビションの慾望は、ピットの慾望に比して、邪氣少く、私慾少く、而してヤ、殘酷にてありしあり。ピットの慾望は、ナポレオンの慾望に比して、姦邪多く、私慾多く、而してヤ、緩漫にてありしなり。ナポレオンはアミン

の條約を履行せむことを主張せり、——平和を來さむが爲め。ピットはアミンの條約を破棄せむことを言募れり、——歐洲の天に戰雲を漲ら

しめむが爲め。
兩者孰れを以て、最も憎むべしとするぞ。

ナポレオンが世の多くの史家より批評を受くるは多くは此くの如き類のみ。渠固より天人にあらず、聖哲にあらず、純良潔清の人を標準とせば、渠に非難すべきものは實に多からむ。然れども、世の多くの帝王を見よ、世の多くの將相と見よ、彼を咎めずして、此のみを咎むるは酷あり、己れ數等を超ゆる殘虐の所爲に及びながら、他の少許の缺點を曉々するは非あり。世の多くのナポレオン批評家なるものは、陋者にあらずむば即ち曲者、豈に慨するに勝ゆべけんや。

又、ナポレオンは萌芽し否、既に萌芽して將さに漸次繁盛ならんとする共和政體を佛國より觀ひ、已れ一個の高慢の慾を逞ふせむが爲め、君主專制政體を復興し、已れ其の帝坐の上に恥かしくも、かく上ぼりたりと

の故を以て、世の多くの非難を蒙むる。而して又北米の文士は往々自國のワシントンを以て渠に對比し、何故に渠はワシントンの如く、爲すべき事を爲し、遂くべき事を遂げたる後は、又舊の一平民に復り、血と殘酷とを以て、己れの名を汚漬することを避けざりし乎と非難す。是又到底淺薄の所見たるを免かれず。先づ第一、斯る事は出來得べからざるの事あり、測りても見よ、共和政の主義を識認し、其本體を辨別し居りしものは、當時の佛國には極めて少數にてありしなり、革命の旗揚げの如きは蓋し君主に對する積不平堪ゆるに堪ゆる能はざるよりして、一二の自由平權論者の揚言あるに乗、何等の深慮遠謀もなく、唯だ蜂起亂動せるものに過ぎず、共和政の美を認め共和政の徳を熱望して然りしにはあらず、故に亂動に繼ぐに亂動を以てし、再びハーボン家の再興を見る歟、若しくは大手腕家出顯して獨裁專政するにあらざる限りは何時にな

りても平和の天を仰ぐ能はざるもの、是れ當時の佛國の狀態にてありしあり。又一步を譲りて、國民舉げて共和政の建設に銳意熱心ありとするも、歐洲諸列國は決して平穩に佛國をして共和政體たることを許さざるあり。北米の文士よ、四圍なるカナダ、メキシコ、及びフロリダの諸邦を假りに君主專制國と見做し、突如合衆國が其諸列國の中央に共和政體を建設せりと假定め見よ、カナダ、メキシコ、フロリダの諸君主國の驚愕はそも如何にあるべしとするぞ、國民もし其轍を履むに及ば、由々敷大事となるを懼れ、列國の君主は皆一所に首を鳩め、合衆共和國を扯裂し蹂躪せむとの目的を以て鞏固なる同盟を形ち作れりと假定め見よ、合衆共和國は自衛に急に、列國は姦邪の計畧を以て合衆國を脅迫し、争亂絶ゆる期なしと假定め見よ、然らば、諸士は少しく、革命當時の佛國の狀態を心理に描き出すことを得む。而してワシントン合衆國の頭領

とあり、國民を率て諸列國と對戦せりとせよ、吾の兵は渠の兵の十分一にも充たずとせよ、而かもワシントンは百たび戦ふて百たび勝ちたりとせよ、百たび勝つと雖も、列國の兵夥多にして、容易に同盟を解きて平和の條約などを申し出すことなしとせよ、ワシントンはドコまでも國家の爲め國民の爲めに、身を死地に投下て劇戦するとせよ、合衆共和國のワシントンを尊信することそも如何ばかりあるべしとするぞ、ワシントンは依頼すること如何ばかり深く厚かるべしとするぞ、時ふ平和の天を見ることあり、吾も彼も兵を弭めて其の外形のみは兎も角も、泰平の兆顯はるゝこともありとせよ、ワシントンは斯時退休して又舊の一平民に復るべき乎、斯くすること果して渠の徳なるべき乎、炯眼能く列國の腹心を看破り、一時の平和決して永く頼むべからざるを知り、國民の尊信依任しかく切にしかく深さを願ひみ、ア、而かも尙ほワ

シンントンは身を退きて平和安靜の境に閑日月を娛むべき手、シカすること果して渠の徳あるべき乎、是れ實に一疑問あり、此疑問を解釋するに苦まざる人は、佛國の當時に於けるナポレオンの心事を察知するに苦まざるべし。邦土隔絶し民人快活、名正しく事順に、而して敵手は唯だ英國一つあるのみ、米國共和政の大統領ワシントン^{ワシントン}を以て、直ちにナポレオン、ボナパルトに比するの、其當を得ざるものあることは、實に此くの如し。而かも米國の文士は尙ほ批評眼を具すると云ふ手。斯く云へばとて吾人は、ナポレオンの徳を以て、ワシントンの徳に優れりとするものにあらず、唯だ對比の等を失するを米國の文士に責むるのみ。道德の人として、ナポレオンのワシントンに輸する所あるハ吾人の固より認むる所。

前記せる如き状態の裡に、ワシントンを置くも、ワシントンの處置の、ナ

ポレオンの處置と同一ならざるべきは、固より吾人之を知る。蓋しナポレオンは徳義の人として、一の倭人たるを免かれず、而して若し渠が精金美玉の君子にして終るが如きことあらむには、それこそ吾人の吃驚決して尋常にあらざるなり。渠ハ幼時より武斷の教育を受けたり、道德宗教の感化を受くべきものどては、終始四圍に何ものもあらず、壯時、眼に映ト來るものは、血雨殘酷の修羅場あり、耳に響き來るものは、砲聲銃聲なり、而して身を投せるは古今未曾有の革命の旋渦中あり、故に渠は、此くの如き事情の下に多くの人の化する如き人と化せり、即ち、計策の示すところの道途を履むの外、寸歩も脇道^{ワキミチ}せざる冷酷の人となれり。殊には渠は、我慢強き性質のものあり、他人よりの制肘を甘ド居るものにあらず、是れ渠に折々過激の行爲らしむるを免かれず。要するに渠は、平和温厚の道德的人にあらず、唯だ茲に注意すべきハ、渠の不穩過

激の諸戦闘の多くは、佛國を四圍せる諸列國の不正、不信實、を憤慨せるより起因せるものたること、是れあり。渠は以上陳する如く決して盛徳の君子にあらず、然れども又不道德の人にてはあらざるあり、渠は道德高からざるも、其高からざるが故に他人に加害せるものにはあらず。茲に一言すれば即ち足る、渠が渠の如き佛帝にあらざりせば、佛帝國は彼の如く久しく四方の敵に抗して獨立を保持し居る能はざりしと。

ナポレオン、ボナパルトは道德の人にあらず、而かも決して不道德の人にあらず。

其の渠が人情に於て缺くる所あり、慈悲と云ふ如きものは一分目だも渠の心胸の重さを加えずと云ふに至つては、酷も亦甚だし。渠は屢々、渠の如き人には決して望むを得べからざる愛憐仁恤の行爲を吾人に示す。曾つて英國の一水夫俘虜とありて佛軍に幽閉せらるゝものありき。

渠ある時脆弱ある一端艇を自から構造し、之に航して、本國に歸らんと企て、イヨク、當夜暗に乗つて、海を渡らむとせる其當日、事發見して捕えられぬ、亂問せらるゝに及びて其首實する所を聽けば、本國に一老母あり、そを歸省せむが爲めに、大胆にも本の葉の如き舟に乗り、死生を運に任かせて、此事を敢てせるものなりと、ナポレオン此一件の事を耳にするや否や、『オ、可憐兒よ、而して斯る可憐兒の母たるものは、決して尋常の婦人にあらず』と叫び、一瞬時をも移さず、水夫二十名を、休戦旗を樹てたる一船に乗り込ませしめ、少あからぬ財貨を彼の可憐兒に與へ、護衛して以て本國に送還せしめぬ。此くの如き類カクの事は蓋し一にして足らず、彼の負傷の兵士を慰恤するの懇篤にして親切ある能く世人の熟知する所、而して渠が此の仁意の行爲は兵士を己に繋ぐ一の堅硬なる鐵鎖たりしことも、亦何人の疑を容れざる所なり。大激戦後の滲漶たる光

景を、曉天、月夜に瞻望して、小兒の如く大聲を發して泣鳴せしこと屢々あり、其部下の愛將の斃るゝに遇ふては、殆んど眠食を忘るゝまでに慟哭す。渠は決して人情を解せざる冷漢にあらす、涙なきの猛鬼にあらす。唯だ自個の判斷之を讚し、己れ一たび之を決行すべしと覺悟するに及びては、愛憐之を抑むること能はざるあり、仁慈渠の行手コテを遮ること能はざるなり、茲に於ては渠は實にめぐる所にめぐり止まる所に止まる一の輪轉機械とある。渠が往々人の忍びざる所を斷行する恐るべき酷薄者ありと評せらるゝもの實に茲に存す、決して渠の天質の殘忍なるにはあらざるあり。

・

エニン侯の虐殺事件は、ナポレオン一生の大汚點大瑕瑾ありとして數えらる。然れども是又渠がエニン侯族類の戀愚と邪計とに挑撥せられて、一時發怒の餘に出でたるものに過ぎず、而して當時の事情を熟

知するものは、恐らくナポレオンの此果斷を強ち無理ならぬ事として宥恕すべし。英國に一大激戰を試みむとして準備に餘念なき折柄、渠は己を暗殺せむとする一大隱謀の企てられたることを耳にしたなり、而して斯の邪計の糸の兩端や、一は倫敦ロンドンに在り、他の一端は巴里パリに在り、兩都の間には秘密ある道途ありて、絶えず彼と是と通信往來す、秘密ある道途發見せられたり、隱謀一味の徒ヤカラ若干名捕櫻せられたり、英國に遁逃せるハボン家一族謀主とあり、英國政府之を幫助し百般の費用盡く英國政府の支出する所あることも探知せられぬ。隱謀は實に酣熟して、ピナクリエー彼の姦惡あるギョーシを伴ふて、巴里パリに來着し、わづかにして佛國第一執政官たるナポレオンを爆裂彈にかけて一切の事を了らむとする其間際マギに於て捕櫻せられたり。殊に驚くべきは、ナポレオン幕下の將モールモ亦隱謀一味に加擔し、己れが曾つて戴ける主將を斃さむと

するに全力を注ぎ居ることも明らかにあれり、モールは蓋し那翁を倒して己れ那翁の地位に立たんとする嫉妬の情より隠謀に加擔せるものにして、パーボン家再興の事は渠の希ふところにあらず、故に渠とパーボン一族との間に不和を起し、それが爲め隠謀決行に幾多の躊躇と遅延とを與へ、ナポレオンをして事情を探知するに大なる便利を供したりき。ピナグリユ一捕はられぬ、次でデヨ一も捕えられぬ。儼重なる糾問の後、渠等は事の次第を白狀せり、遠からずして、此隠謀の頭領と仰ぐべきパーボン一族の一公子の英國より到着すべき筈なることをも自白せり。ナポレオンは直ちに、其到着の場所と定まれる海岸に兵士を馳せ、ソコより上陸するもの、何人なりとも一人も残さず捕縛すべきことを命ぜり。派遣されたる兵士は數日間、ソコに張番せるが、一艘の何ともつかぬ船の海上に、往きつ復りつせるが認められたるが、此方に何

等の合圖アイなきを訝かりたるものにや、其のまゝ海上遙かに漕ぎ去れるよしをナポレオンに報せるのみ、其他何等の手かゝりとはあらざりき。モールは審判され有罪と認められ、流刑に處されぬ、是れ渠が待設けたるより頗る寛大の處罰ありき。ピナグリユ一も又獄に投せられぬ、其他遠謀一味のものにして、巴里パリにあらむ限りのものは盡く捕獲せられたり。唯だナポレオンが最も偵捕に急がる王族の一個だも未だ見當らず。

此の隠謀事件はナポレオンの經綸に、大なる障害を加えたり、胸裡に描ける英國との激戦も今は中々に着手すべくもあらず、市民は日に市に叫呼して其狂躁言語に絶し、若し此まゝにして數ヶ月を経過せむには、ヨシ爆裂彈の下に斃れざるも、國民の信用を損し、自個の威嚴を墜し、隨ふては、一國を擧げて、混亂の中に埋没するにも立至りかねまらざらむと

も心配多き光景を現ト出せり。性急あるナポレオン、豈に更らに其性を急にせざるを得んや。渠の忿怒は實に其絶頂に達せり。相當ある對手として渠等より待れず。王族とも云はるゝものまでが、一個賤劣ある者を處する如くに、己を暗殺して斃さむと能くも能くも企てつるよと云ふの感念は、渠をして眞に切齒扼腕せしめたり。渠はハーボン王族を探偵するに些の懈怠とてはあらず。渠は全心全力を此一事に注射せり。時に來り報ずるものあり。王族の一個、ストラエスハーグのほどりエッテンヘームに發するものありと、ナポレオンは直ちに一間者を放ちて其舉動を探偵せしめぬ。間者の報ずる所に據れば、罪ありて追放せられたるドームリア將軍亦俱に在り。ナポレオン豈に一瞬間だも躊躇せむや。直ちに兩個を捕獲せり。若公子及びドームリア將軍が果して隠謀一味のものたりしや否やは、ナポレオンの罪を判するに蓋し大あるか、わり

あらず。ナポレオンはハーボン王族の一個を屠殺せむと希へるなり。而して已れの手に落ちたる最初のものを屠殺せむと決意せるなり。懦弱爲すなきハーボン王族輩如きに、己れ今少し油斷し居たらむには、一個の犬の如くに謀殺せられたるべかりしと云ふの憤怨は、道理の聲渠の耳に聞えざるまでに、シカク激甚にてありしあり。絶高の高處に身を据へ、人間が會つて此れまで想像だも及ぶ能はざりし大經綸を實地にせむと無類絶倫の渠の腦力を縦横無盡に働かしめつゝある其最中モナに、何ぞや、追放流浪の王族共が、堂々たる手段に出づるにてもあることか、陰謀を凝して、己を暗殺せんとすと、ヨシ、吾におもわくあり。渠等が秘密に計畫せることを、余は公けに舉行して以て渠等に示し見すべし。以て渠等の膽を寒からしむべし。ア、是れナポレオン當時の意氣にてありしあり。渠の此の意氣は、時ありて左右の者に語れる渠の言語により

ても察し窺はる。シェルスの歴史参照すべし。愚かある嫉みよりして遂に大膽なる隠謀に與するに至れるモールの薄志と弱行とは、余は多く責むることをせず、渠に對しては寧ろ憐憫の情の起き來るを禁ト得ず、然れども彼のハイボン一族のものに至つては、余の手に落つる第一の者を無遠慮殘酷に屠殺せずしては止まざるべし。渠輩は一野獸の如くに余の血を踐ぎ得べしと思惟す、然れども余の一滴の血は歐洲列國諸帝王の頭血を盡くあつめたるよりも更らに尊とし、余は目覺しき一痛撃を渠等に加えて、渠等をして渠等は今如何ある人物に對して計畧を凝らしつゝあるものなるかを覺らしめむ。ナポレオンはハイボン王族を同視せり、今回の隠謀に與すると否とを問はず、皆な同一なる感情を己に對して抱き居るものありと覺悟せるあり、渠が此意氣の高潮に不幸にも落合したるもの即ち彼インイン侯なり、如何に公子なればとて、

如何に幼弱なればとて、何の用捨のあるべきや、渠ナポレオンが精密ある糺明を遂ぐることもなく、捕ふるや否屠殺の虐を逞ふせるもの偏へに渠の此の燃ゆるが如き發怒の餘りに出づ。兎も角も王族の一個なり、其歳も未だ壯んからぬ若者あり、而して果して罪あるものあるや否やも未だ確とは分明ならず、ナポレオンがインイン侯を屠殺せるは、佛國の頭領とも仰がるゝ身分にしては、あまりに酷に忍べるの處置たるを免かれず、兎も角も渠の一生中の一大汚點たることは、吾人の争はんとする所にあらず。然れども、前記せる事情を吟味し來れば、ナポレオンの此處置に就ては宥怒すべきもの頗る多からずや。ナポレオンの處置は己れに薦めらるべき毒杯を、其薦めたる者の唇に押し返したるに過ぎざるものにあらずや。英國を始めとして、歐洲列國の諸帝王は口を極めてナポレオンの公子屠殺の惡行を驚呼せり、佛國に逆ふての諸列國の

同盟も此屠殺事件其原因の一あるが如きまでに、列國の諸帝王は恐怖し、戦慄し、憎惡せり、然れども、ナポレオン、ハーボン王族、其地位を轉ト、ナポレオン其ハーボン王族が薦めたる毒杯を啜りたりとして見ば如何。列國諸帝王はシカク口を極めて、ハーボン王族の失行を非難攻撃すべきや如何強敵の端かく斃れたるを祝喜して、面に笑容を上げすことはあらざるべき歟、ハーボン王族の手柄を寧ろ讚賞することはあらざるべき歟、まことに疑はしき事と云はざるべからず。將た又英國が佛帝ナポレオンをエルバ島に於て待遇せるの冷酷ありしは如何、苟且めにモ一帝王ナポレオンを待つに愛顧の將チーを隨伴することすら嚴禁せる、不寛裕無雅量の處置振は如何、之を激怒の餘りに出でたるインイン侯屠殺の事に比するに、孰れか最も責むべく、孰れか最も答むべきか、容易く判ト易からざるものあるなり。

痛切

之れを要するに、ナポレオンの道德は、決して讚美感嘆すべきものにはあらざるも、之れを當時の列國の諸帝王諸將相に較べて、適かに優れるものたるは疑ふべくもあらず。殊には渠が『人類不羈』の朋友とあり、出生は如何に卑しくとも、才能技倆の秀でたるものには、充分の好地位を與へて容まざるが如き、其功其績豈に容易に没すべけむや。渠は國家として佛國を愛し、其繁榮を誠心誠意希えしのみ、に止まらず、國家下層の地に墊する人民の安寧と幸福とを擁護し、扶植せり。渠は種々絶大なる慾望を胸底に懷抱し、時に際し、場合にのぞみ、之を實地にせむことに銳意熱心なりき、而して現に之を實地にせるものも、蓋し甚だ鮮なからざるあり、而して慾望や、獨自の私慾に出づるものは、少なく、衆の爲めに計れるもの十常に八九あり。慾望と云は、云ひ、ナポレオンの慾望の如きものは、豈に敬して重んぜざるべけんや。正直にして高尙ある帝王として

は、古往千百の歐洲の帝王に優ること渠は實に過かありと云ふべし。正直！ア、實にナポレオンは正直の人にてありしなり、己の思ふところの事ハ、如何ある時、如何ある場合に際しても、之を公言することを敢て憚からず、其公言せるところの事は、如何なる時、如何なる場合に際しても、之を斷行するに躊躇せず、直往直進、磊落不羈、胸中常に一抹の芥滯さし、皎々然たり堂々乎たり、渠を見るは、眞に一個の男子を見るが如し、善も、惡も、邪も、正も、盡く渠は人の見るに任かず、隱險と云ふ如き類のものも、如何にして、渠の性質中に見出すこと能はざるあり。之を諸列國の帝王將相の臆病未練、口に道義を唱ふるも、行爲常に其の云ふ所と一致せざる卑しく陋しき人間と比するに、其の差會に天と壤とのみに止まらざるなり。諸列國の帝王將相の幸なるは、渠等の才幹の劣等なるにあり、智能の頗ふる足らざるにあり、男子らしからざるにあり、優柔ある

にあり、不斷あるにあり、凡そ此等の缺點あるが故に、渠等は惡事と云ふことをするも、立派に仕遂ぐることの能はざりしなり、若し夫れ渠等をしてナポレオンの半分ほどの智力才幹あらしめむか、如何に渠等は殘虐の所爲に及ぶに躊躇せざりしとするぞ、如何に佛國に侮辱を蒙らしむるに憚らざりしとするぞ、渠等が満足ある智能才幹に乏しかりしこそ、渠等の至幸至福なれ、渠等は渠等の劣等の人物に作爲せられたる其恩惠を皇天に向ふて充分に感謝すべきなり。卑怯未練なる臆病者は又、ナポレオンが列國の同盟軍に征服せられ、再び猛烈の威を奮ふに由ききを見たる折、列國の人民及び佛國の人民が拚舞歡喜して渠の敗北を祝祈したりきと云ふのことを喋々して、是れ、如何にナポレオン、ボナパルトが人民一般より厭惡せられ、憎惡せられ、居りしかを睡して餘りあるものなりと云ふ。然れども新たに平和の天

を仰ぐを得たる折の、意外の歡喜の絶叫は、以て人民の本心を確實に説明するものとは云ふべからず、將た其の歡喜や蓋しナポレオンの斃れたるを、祝祈しての故にはあらず、擾亂の苦を遁れて平和の樂を享受するを得るを喜べるものに外ならず。其の如何に渠が本國人民に愛好せられ尊敬せられ居りしかば、エルバより渠が單身上陸し來れる折の人民の振舞を見て知るべし。前さしに何等の計畫を施せるにあらざる、何等の打合をなし置きたるにはあらずして、渠の孤身飄然大膽不敵にも、人民の感情の中に其一身を授けたり。一方には屹としたる帝王あり、強硬ある政府あり、權力強き軍兵あり、此方への人民の愛の一あるのみ、而してナポレオンの前者を盡くあつむるも尙は後者の力に及ばずとあせるあり。一握にも足らざる従者を率て再び故國の岸頭に足を掛けたる渠が不敵の振舞は、感情の力あるものゝ時ありて如何に雄壯なる偉

觀を呈し來るものあるかを示すとす。ア、何人かある、ア、何處にかある、自個が以前の事業は以て民人をして充分なる報謝を何時にても己れに酬ひ償ふに躊躇せしめざるべしとの確信を持して、無遠慮に、其民人の只中に單身飄然落下して、毫も顧慮する所なき、磊落不羈の大勇者は、抑も何處にかある、ア、歐洲列國諸帝王諸將相中誰人か斯ることを敢てし得るものぞ。岸頭に最初にナポレオンを圍繞せるものは、兵士にあらずして普通の人民なりき。渠が市端豆大の地にテントを張れる時、市民の感泣して群集し來り、救世主再び降誕せりと絶叫して、渠の足下に跪けり。渠がグレノール差して進める時、野は四方の小丘より、飛下し來る雲霞の如き樵者農夫を以て充滿せり。群集はナポレオンを圍繞し、天地も裂くるばかりの喊聲を擧げ、遂にグレノールに到着せるが、門衛は堅く門扉を鎖して、市内に入るを諾んせず、而かも門内

の兵士は虧隙より手を差出して門外の人と握手するなり『吾友來れり』
 『吾友來れり』との絶叫は門の内外より呼應せり。時に城内に一種何とも
 別らぬブツ／＼の聲起れり、次第／＼に其聲高くあれり、ナポレオンは
 今は疑はず、是れ城内の兵士が軍勢を聚めて吾に抗せむとするものな
 りと、然るに何ぞ圖らむ、城内六千の住民一時に起ち、棍棒を携へ短銃を
 提げ、門扉を抜くを拒める兵士を脅かし、其の聽かざるを見ては、遂に兵
 士等を倒し、門扉を敲き破りて此方に突進し來るあらむとは、六千の市
 民は、ナポレオンに附隨し來れる各地々々の民人と、互々に握手し拍手
 し喝采し、救世主を再び得たるを祝賀し合ひ、或るものはナポレオンと
 馬より引下し、渠の手足に接吻し、渠の上衣を抱て號泣し、其狀恰かも狂
 せるもの、如く斯くして絶呼絶叫の裡に、ナポレオンは群衆の肩上に
 擔はれつゝ、遂にリオンに到着したり。リオンの門扉も又堅く鎖されあ

り、門牆の上には劍戟の光り閉めけり。ナポレオンは打撃を加へて、そを
 打破ることをせず、偏へに兵士の感情に訴へ、大膽にも悠々馬を驅つて
 門前に進み寄り、『當時エルバの流人變きの佛國帝、ナポレオン、ボナパ
 ー、今は兵士を率ゆる能はざれば、市民の軍を組織して、巴里に進まむか
 爲め今こゝを通過せむとす、余を通過せしむると否とは一に諸君の意
 志如何にあり、一に諸君の權力の裡にあり、諸君等劍を抜かむと欲せば
 劍を抜くべし、銃を放たむと欲せば銃を放つべし、余には一兵なし、一門
 の大砲なし、余は到底諸君に抗する能はず、否抗するを欲せず、諸君等に
 して余に敵意を抱かむかぎり、余は到底佛國帝たると能はず、余は寧ろ
 る茲に諸君等の銃鎗の下に斃るゝを希ふあり、余は多言せず、一抵抗を
 試みむとはせず、余は茲に余の一身を諸君等の掌中に投ずるあり』と高
 く呼はると同時に『吾帝來れり』『吾帝來れり』の叫聲門牆の裡に起り、兵

士等の銃砲の筒先きをナポレオンに向けむといせず、ナポレオンの側に馳せ近づきて、兵器を却つて城門の方に指し向けぬ。此くの如くして、流人ナポレオンの一彈丸を一市に放つの難義もなく、一步を進むれば一兵を獲、十歩を進むれば十兵を獲、一里二里する毎に百千の兵を加え増しつゝ、遂に巴里に來到することを得たり、權威は恐怖に導かれず、愛と親とに導かれて、ナポレオンの身邊に附着せり。パーボン王族の威光は、ナポレオンの出現と共に倏忽にして消え失せたり、斯くしてナポレオンは再び佛國帝王の高坐に上るを得たり。

臆病未練なる曉舌者よ、少しく考慮を煩はし見よ。古往千百の歐洲の帝王中誰人が臣下に信任する此くの如く厚く、此くの如く深きものあるか。虚心平氣に一身を民人の意志に任かして冷然たる此くの如き大膽不敵なるもの一人にてモ之れあるか。斯くても渠は人民に憎惡せられ

しと云ふを得るか。ア、何時、何處、如何ある人民にも、己等が自由を壓迫檢束する桎梏を鑄鑄する帝王を待つに、此の如く懇篤親切あるものはあらざるなり。ア、誰か渠を民人より厭惡せられしと云ふ。ア、誰か渠を民人の壓制者なりと云ふ。

戰將としてナポレオンの二大失策は、スペインの捷利とロシアの進撃とあり。前者は實に無名の攻撃にして渠の徳に於て傷くるもの頗ぶる甚しとせず、後者は實に渠が一生を傷ふりしものにして、ナポレオンの威勢權力此際一時に墮落せるあり。爾來幾度か渠の勢威を回復し、神變鬼没の奇策を運らし、軍星屢々灼々の光を放つもの稀ならざりしと雖も、如何にせむ、列國の同盟軍——バルナツクよりポスポラスまで、アチヤンセルよりメザタクニアンに至る——全歐洲の同盟軍の精銳

を聚めて攻撃し來るに遇ふては、ナポレオンの大手腕も亦遂に如何ともする能はざりしなり、遂に巴里府は同盟軍の蹂躪する所となり、ナポレオン敵の軍門に降り、エルバに流謫せらるゝに了れり、翌年エルバを脱して再び軍旗を翻し、龍戰虎鬪人目を眩惑せしむるものありしと雖ども、ウオートルローの一戰、遂に渠の一生に終を告げたり。

後人渠の戰畧を非難するは非なり、斯くすれば捷と獲たりしならむ、斯くすれば、衰運を回すことを得たりしならむと、陳辨批評するハ大に愚あり、ナポレオンは恒に必敗の地に立てるあり、佛國は終始大危厄の中に漂蕩し居れるあり、何時如何なる戰鬪にてモ、形勢を説き、軍情を示さるゝに遇ふては、如何ある智勇の士なりとも、一計だも案ト出す能はざる其望みなき戰爭をナポレオンは常に運び居れるなり、豈に戰畧批評を容るの地渠の軍にあらむや、今日に至るまで渠の戰爭戰畧を記録論

評せるの書は、實に汗牛充棟も管みならず、而して其論評の極や、常に同一の結果に來らざるはなし、曰く、渠の戰畧に一も缺くる所なし、曰く、渠の軍旅は悉く整正せるものはあらず、曰く、渠の軍陣に毫毛の弛みあし、と、蓋しナポレオンの戰に勝てることや、是れ駭絶奇絶の事あり、渠の手腕や天人の手腕あり、渠を人界に降せるも天あり、渠を人界より覆るも天あり、茲に至つては、吾人渠の勝敗死生に就て言ふべきの語は唯だ「天なり、命なり」の一句のみ。

然れども吾人は、渠の事業を埋没すべからず、渠の功績を隠蔽すべからず、何となれば、是れ事實なればあり、之を知らざるは、天が吾人に附與せる明眸を好んで自から盲にするものあり、知て知らざる爲するは、天が人類に附與せる明眸を、人類が傍らより之を盲らにするの罪を遂ぐるなり、豈に好んで従ふべきの事あらむや。

後年、ナポレオンの敵者の偏見、誣妄、嫌惡の類、幸に其迹を潜め、雷同附和の浮薄、腸闔昧眼、幸に清め拭はれ、無私公平の見識を以て、此の一個の偉人——平民兵卒を以て遂に至尊至重の佛國の帝位に上れる此の一個の偉人が、歐洲の傲慢なる帝者王者と自己一個の力を較しつゝ、議論を以てしては渠等を説伏し、干戈を以てしては渠等を戰伏し、當時の偏見と邪説とを排斥し、左手には武を握り、右手には文を握り、數百年來の積弊たる壓伏專制の組織を破壊し、世界の耳に「人類の權利」の何たるを打ち込み、才能あるの士に充分に其才能を揮ふべきの地を與へたる大雅量、大腦力を與へ、而して更らに眼睛を轉じて、渠が創定に係る法制法規の如何に整頓せるものあるか、渠が建設に係る諸學校、諸會社、諸組合の如何に社會に偉大の功益を與ふるものあるか、渠が保管伸張に汲々たり

し人類の自由の如何に渠の爲めに堅固になりしかを見、將た又渠の諸戦争は偏へに自國の防禦護衛の爲めに已むを得ずして起せるの師なる事、即ち平等同權が專制壓抑に逆ふて戰へるものに外あらざる事を、冷靜に沈着に、確實に、觀察し來るの明敏正直なる人士出づるに及ぶ時、ナポレオン、ボナパルトの真相眞面目始めて世間に表し出さるべし。蓋し今日の多くの文士は、臆病者のみ、倭人のみ、小膽者のみ。ナポレオンが絶大の事業に驚き、其傍に近づき、仔細に渠を觀察するの勇氣すらもあらぬなり、渠が絶高絶遠の天上にひとり翱翔逍遙するを驚き仰き、己れ等が羽翼なくして渠と共に天空に飛舞する能はざるを怨み歎ち、果ては罵詈を試みて、わづかに自個の鬱悶を遣やらむとする如き類のものゝみ。ナポレオンの眞面目の世間に紹介せられざるも亦宜からずや。吾人は、歐洲、米洲の諸文士に誠實に告ぐ、乞ふ、事實を觀察せよと——佛

國當時の状態、那翁の對内對外の政策始續を有りのまゝに觀察せよと。此の僅々の小冊子、幸に諸士の注意を喚起し來るの媒ともならば、吾人の願慾即ち足る。

本篇を終るに、那翁死時の光景を描きて、筆を擱かむ。

もとより偶然にはありしからむも、某月某日——ア、斯日や、那翁が永眠に就けるの日あり。

曉來黒雲睨むが如くに、天の一方より他の一方に、或は緩、或は急に、運去運來せるが、俄爾四顧濛々冥々となり、電閃めき雷轟けり。海潮激して騰ること二十丈、古來曾つて潮水に浸されし例^{メソ}あらずと傳ふる那翁、謫居の屋背に聳え立てる、巉崖の一角を嚼ひて、海腹に吞下するもの前後六回、其響き凄まじくなんぞ云ふばかりなし。斯の暴風暴雨に、吹き敲かれ、今

にも傾倒せむかと危まるゝ、一石屋の一房の沈寂沈靜は更らに又言語に絶えたり。病床を繞つて立つもの、すべて六人、其面青きこと藍の如し、床に横はるもの、ア、是れナポレオン、ボナパルトなり、時に右方の窓框、颯風に撲ぐり墜されて響き、憂然、那翁身を擡げぬ、渠の眼閃めき、脂體確乎とあり、左手を前方に高く翳して、叫聲鋭く『勇氣！』『彈丸未た吾身を貫かず』ア、是れ渠が戰陣に臨み常に將士を勵ませるの語なり。死の手渠の頸邊に繞ぐり、一瞬一瞬に渠の氣息を引しめつゝある今際^{イマ}に及びても、尙ほ渠の夢は尖頂塔^{ピラミッド}の邊り、ダニユーナの岸頭、伊太利の平原、彈丸雨注の修羅場を駆け回りつゝありしあり。硝煙の埋に斃れ、骨を馬革に褻むこと、渠の願なりしならむも、渠は遂に孤島落莫の裡に其永眼に就くこと、の已むを得ざりき。

『ナポレオン』ノ後に書す

宇宙あるの外に宇宙あるを知らず、先人先輩の外に先人先輩あるを知らず、他人の安心の地に自個の心を安むト、他人の立命の境に自個の命を立て、他の人間の模型の中に自個の人間を打込み、以て吾の處世の能事畢ると感念覺悟するの卑怯者は、吾之を知らず。苟くモソクラテスの前にソクラテスなく、カントの前にカントなく、孔孟の以前に孔孟なく、シーザル、アレキサンドル、ナポレオンの以前に、シーザル、アレキサンドル、ナポレオンなく、コロンブス、ワットの昔に、コロンブス、ワットなく、シエキスピア、ホーメルの前に、シエキスピア、ホーメルなきを知り、吾も人あり、彼も人あり、吾も又前を曠ふするの一偉人とあり、天が吾を斯世に降せる任務を全ふし、濟民の業救世の績を擧げ、天が吾に附與せるあら

ゆる能智を圓滿完全に發達せしめ、以て吾が所有の靈智靈能を煙滅埋没せしめざらむと期するもの、宜しく眼を大にして、説の異同を論せず、時の古今を問はず、其特殊の點に於ての發達のみあるにせよ、大凡そ大人英傑と呼ぶる、ほどの人物の厚さ重さを測量識別して、人間あるものは、或點に於ては斯くまでに其力を展べ得るもの、或點に於ては斯くまでに感念を純潔にし得るものあることと、研究鑑識すること頗ぶる必要あり、斯くすること屢々吾意を強ふするものあればあり、斯くすること吾も彼等を凌駕すること敢て難きにあらずとの感念を惹き起さしむるもの屢々あればなり。

ユゴ一の書を讀めば、凡そ世の英雄豪傑と呼ぶる、ものは、惡むべく、厭ふべく、卑しむべきものはなきを覺えしむ、而かも、ナポレオン一生の功業を審査し來れば、吾人は渠の雄心偉腦に瞠若して、人間また斯くま

でに六尺の形軀の運動を逞まゝにし得るものなるかの歎を發せしむ。ユゴ一の至純至潔の仁心俠氣に心折感伏するは可なり、然れども、之れが爲めに、偉人豪傑の大手腕を看察するの目を盲にすべからず。而して、英雄豪傑肌ムネの派手ハヂやかあるに心酔して、人間には他に至美至妙ある靈界あるを忘るゝ如きは、更らに大に不可なり。

天は無用に、人類に肢體智能を附與せず、看るべきの眼は大に看ざる可らず、働かすべきの手腕は大に働かせざる可らず。

吾人は聖人君子の高潔ある心胸を有し得ると同時に、世の所謂豪傑者流の敏腕活力を兼ね見へ得べきものなるを信するなり。

吾人はナポレオンに缺點多きを知る、之を知ると同時に、渠の大手腕大力量を識認するを忘れざらむを欲するなり。

本書は、北米近代の文傑、トッドレー氏の筆に成る、問々ナポレオンの徳

を揚ぐるに過ぐるが如き觀ありと雖ども、歐米今日衆多の文士の偏見を道破して、大に人意を快にするものあり。當今本邦の思想界、一意道念の研究に切りにして、人類の活力に就て思慮するもの頗ぶる少きが如き憾みあり。吾人の本書を譯して諸文士の一閱を煩はさんとする所になり。

明治二十五年第十月東都に於て

原 余三郎識

ナポレオン終

明治廿五年十月十九日印刷
 明治廿五年十月二日出版

正價金拾五錢

纂譯者 原 余三郎

發行兼印刷者 大橋 新太郎
日本橋區本石町三丁目十六番地

印刷所 杉原活版所
京橋區元數寄屋町四丁目二番地



東京日本橋區本石町三丁目
 發兌書林 博文館

紫山北村三郎君編著

世界百傑傳

(全部出版完成)

全部拾二卷 紙四千萬頁

每卷讀切 洋裝美本 正價一册三百頁以上(金二拾錢六冊金等圓拾錢)

編一第 英雄 鐵木真之傳 航海發明家 コロンブスの傳 政治家 ヲスレリ之傳 政治家 カラットストン之傳 哲學家 ヘーゲル之傳 哲學家 老子之傳 兵家 武田信玄之傳 兵家 上杉謙信之傳 勇敢發明家 張番之傳		編二第 政治家 ビスマルク之傳 政治家 北條泰時之傳 工業家 シセツブ之傳 宗教家 耶穌基督之傳 英雄 アレキサンデル大王之傳 奇士 ガルハリザイ之傳 政治家 韓非子之傳 政治家 マキアヴェリ之傳 兵學家 孫武之傳 兵學家 吳子之傳	
編三第 英雄 拿破崙第一世之傳 兵家 子ルソンの傳		編四第 英雄 豐太閣秀吉之傳 哲學家 孔子之傳 哲學家 孟子之傳 哲學家 ソクラテス之傳 哲學家 プラトーン之傳 哲學家 アリストートル之傳 雄辨政治家 ガンベツタ之傳 兵學家 ウェルリントン之傳 商業家 ロスチエルド之傳 商業家 マホメット之傳 兵家 アブンシエー之傳	
編五 兵家 クライアアの傳 兵家 ヘスチンガの傳 工業家 ソロアストルの傳 工業家 セーグールドの傳 政治家 リシユエーの傳 政治家 李斯の傳		編六第 政治家 曾國藩の傳 政治家 杜子美の傳 詩人 李白の傳 詩人 李杜の傳 航海發明家 バスコータカマの傳 航海發明家 ホヤルコフの傳 航海發明家 ハバロフの傳 外交家 張儀の傳 外交家 テモセニスの傳 外交家 オスマンパシヤの傳 雄辯家 アモスセニスの傳 雄辯家 オスマンパシヤの傳 政治家 シーザルの傳	

編七第 文人 柳子厚之傳 文人 韓退之之傳 文人 ミルステチンの傳 兵家 李光弼之傳 理學家 ニュートンの傳 理學家 ヲツトンの傳 理學家 ヲツトンの傳 英雄 エマニユールの傳 英雄 テゲートの傳		編八第 英雄 漢武帝之傳 英雄 フレアリツク之傳 英雄 字文泰之傳 政治家 メヘットアリーの傳 政治家 カアール之傳 政治家 施耐庵之傳 政治家 曲亨馬之傳 政治家 ガンテアリーの傳 政治家 韓信之傳 政治家 ハンニバル之傳 政治家 白樂天之傳 詩人 シェクスピア之傳	
編九第 英雄 ナボレオン之傳 英雄 怒爾哈赤之傳 政治家 エルチャコフの傳 政治家 ス丁之傳 政治家 グランドの傳 政治家 モルトケの傳 政治家 ヲルトケの傳 政治家 岳武穆之傳 政治家 司馬遷之傳 政治家 新井白石之傳 政治家 カイライルの傳 政治家 マコレイの傳 政治家 ニーバアの傳		編十第 英雄 ヲジントンの傳 英雄 織田信長の傳 英雄 ウヰリヤム大帝の傳 英雄 親鸞の傳 英雄 マホメット二世の傳 英雄 カタリン二世の傳 英雄 カタリン二世の傳 英雄 陸放翁の傳 英雄 芭蕉翁の傳 英雄 トルストイの傳 英雄 ダーウソンの傳	
編十一第 英雄 藤田東湖の傳 英雄 達磨の傳 英雄 士格別列弗の傳 英雄 曹孟德の傳 英雄 彼得皇帝の傳 英雄 莊子之傳 英雄 チェルゴイの傳 政治家 朱陽庵の傳 政治家 王陽明の傳 政治家 鳩摩羅計の傳 政治家 アダムス之傳 政治家 松浦宗案之傳 政治家 メツタルニツヒの傳 政治家 斑超の傳 政治家 山田長政の傳		編十二第 英雄 德川家康の傳 英雄 クロムウェルの傳 英雄 日蓮の傳 政治家 ビットンの傳 政治家 レンテカルドの傳 政治家 蘇東坡の傳 政治家 始皇帝の傳 政治家 康熙帝の傳 政治家 狩野探幽の傳 政治家 王摩詰の傳	

帝國大學教授正七位内藤耻叟先生著

德川十五代史

全部七卷 洋裝
一冊紙數大判二百頁餘
正價●一冊廿五錢三冊
金七拾二錢全部七冊金
一圓卒錢郵稅一冊六錢

第壹編目次

十月十五日發兌

東照公 台徳公

我が徳川氏執權三百年間の時代は我が國史有てより最も進歩し最も開發せし時代にして其制度風俗文學教育より美術工藝農事商賈宗教に至るまで皆特種の發達を遂げ一個出色の文明は當時大東洋上燦然たる光輝を放てり特に江戸の如きは一時實に世界第一の大都市たりしなり是れ止だ我國民の名譽たるのみならず實に世界文化の上に於て大に注目すべき問題なるべし然るに世間未だ此の時代の歴史として其精確を得たるものなきは日本の一大欠典として識者の毎に歎惜する所にして外人に至りては猶ほ其の精確なるものを得んことを希望するや久し内藤先生は當世の鴻儒にして徳川時代の事蹟に精通せらるゝ實に一代の冠冕たるは天下已に定評あり殊に水戸藩の世臣を以て躬親ら變故に遭遇し深く徳川氏の興亡盛衰する所以に感あり慨然徳川史を修んとするの志あり遺次頗沛汲々として之が史料を輯ると三十年一日の如く今や遂に此書を著し稿漸く成る乃ち將に以て世に問はん此書は筆を廢長八年家康公將軍に任するの日に起して慶應三年慶喜公將軍職を辭するの日に終る其間十五世二百七十餘年の事蹟記述洩らさず其周到精密を待たず風紀の汚隆政綱の弛張治亂得失の跡瞭々として火を見るか如しと云ふより世の一般解僅々の時月を以て訂短摸稜の史を著し自ら欺き世を欺くもの、所爲と天地懸隔す特には是に由て日本之光輝を發揚し併せて世界文化問題の解釋に一大資料を與へしと今更贅言を要せざるべし國家の國家たる所以今日の今日たる所以を知らんと欲するもの必ず皆誦せざるべからざるの書なり今弊館に於て此名譽ある歴史を出版するを得たるは其の尤も榮とする所なり

第一高等中學校教授小中村義象先生 合著
第一高等中學校教授落合 直文先生

新撰日本外史

每卷密 齒挿入

全部拾二卷每編讀切 洋裝大判美本仕立
正價一冊(大判百廿頁)拾五錢六冊前金八拾
五錢全十二冊前金一圓六拾錢郵稅一冊四錢

第壹編

十月二十日發兌

新撰日本外史は國文にて書ける神代以來今日に至るまでの歴史なりその體は紀傳本末にもあらず紀傳にもあらず又開化史にもあらず 新體なり、御矛の雫 は神代の歴史にして 礫殿 一種の 第一編 盧島、天岩戸、肥川、杵築宮、高千山、笠沙の崎 等の數項に分ち終に政治宗教風俗等を叙せられ日の開化の原おのつから知らる文は例の健雅倣止なるものにして知らず、卷の了るを知らざらしむ世の人早くきてこれを読みたまへ

松井廣吉君著

日本百傑傳

每編讀切洋 裝大判美本

正價一冊(大判二百頁)拾二錢六冊金六拾七錢郵稅一冊四錢

第一編目次

●武内宿禰 ●中臣鎌足 ●柿本人丸 ●山部赤人 ●行基 ●和氣清麿 ●坂上田村麿 ●僧最澄 ●僧空海 ●紀夏井 ●菅原道真 ●三善清行

第二編目次

●紀貫之 ●大江匡房 ●平將門 ●源賴義 ●源義家 ●源為朝 ●平重盛 ●源賴朝 ●大江廣元 ●源義經

第三編目次

●武藏坊辨慶 ●西行 ●北條泰時 ●僧親鸞 ●僧日蓮 ●北條時宗 ●岡崎正宗 ●楠正成 ●楠正行 ●北島親房 ●足利尊氏

第四編目次

●細川頼之 ●太田道灌 ●北條早雲 ●僧一休 ●兆殿司 ●十佐光 ●信 ●狩野元信 ●雪舟 ●後藤祐乘 ●毛利元就

第五編目次

●武田信玄 ●上杉謙信 ●織田信長

農商務省農務局纂訂

大日本農功傳

全一冊洋裝
三百頁美本
正價二拾錢
郵稅六錢

上下三千載縱橫六十餘州歷朝常に民食を重ん
ト萬機の政務主として農業に原く是洵に故わ
る也明徳の君上にあり早く農業を示し賜へ忠
良の臣下にあり能く斯業に従ふの結果に非ら
すや本書は上神代より下明治に至る迄大君を
奉め始り農業に功勞ある者百三十餘名の偉業
勳績を詳記したるものにして其國土を經營し
池溝濠溉の便を開き橋梁を架し堤防を修築し
舟楫の利を圖り旱水を治めしもの煙草を植へ
蠶兒を養ひ漆蠟を繁殖せしめ葡萄の栽培を爲
し糖業を起し甘藷を播き楡樹を移せしも農書
を著し林制を立て治水を論し稻種を精撰し義
倉を興せしもの等枚舉に遑あらず忠臣義士軍
人僧侶老農が士人を愛し農業に盡せしもの状歴
々として見るが如き本書は實に瑞穂國の實を
舉げ厚生利用の道にて其裨益實に大なるもの
あり

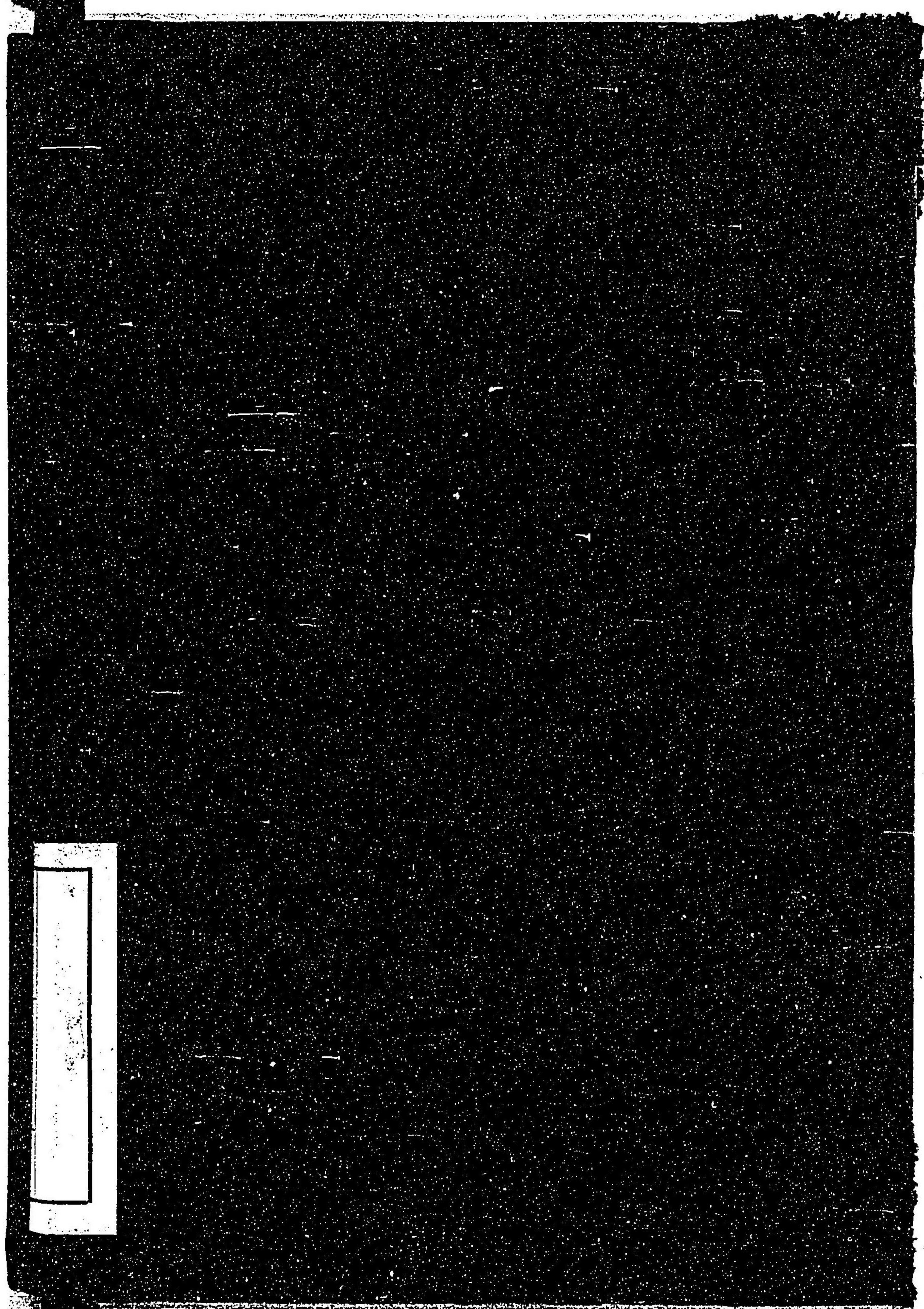
幸福散史澁江保君著

萬國發明家列傳

全一冊洋裝
正價金拾錢
郵稅四錢

現世紀の文明は有形的の文明あり汽船、蒸車
電線、郵便等の賜物なりとは識者の常に口ふ
する所あり然らば是れ等の發明者の傳記を詳
かにし其發明の由來其苦心の狀況を明にする
ときは一には以て現時の文明の來歴を察する
を得べく二には以て將來文明に進むの方法を
講ずるを得べし本書は汽船、蒸車、電線、電話、機蘇
音機、印刷機、郵便銃、砲、輕氣球、其他諸機の發明者
二十餘名の傳記を掲げ併せて古來其發明に關
する沿革及び發明の顛末等を叙述し讀者をし
て知らず識らずの間己れも亦名を擧げ世を
益せんとの奮發心を興起せしむるものあれば
未來の英雄偉人たるべき少年諸君に取つては
必讀の書と云ふべきなり

68
341



Small, illegible text or a label located on the left edge of the dark area.